

# 馬場遺跡発掘調査報告書

——彦根市川瀬馬場町——

1984. 3

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

# 馬場遺跡発掘調査報告書

——彦根市川瀬馬場町——

001.2  
SA27



1. 人形土製品



2. 調査地遠景（南から）

## 序

滋賀県教育委員会では、活力のある明るい未来の滋賀を築くための施策として、豊かな人間性の育成を目指す学校教育の推進や郷土の文化に親しみ、豊かな情操と創造性をはぐくむ文化活動の推進等に取り組んでおります。そうした中で昭和57年度に5校の高等学校を建設することとなり、その一つである河瀬高等学校の建設予定地に弥生時代の集落跡の存在が判明しました。

この報告書は当遺跡の発掘調査の成果であります。

なお、当遺跡は関係機関のご理解を得て、工事を一部変更することにより、現状で保存されたことを付記しておきたい。

昭和59年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課長

外 池 忠 雄

## 例 言

1. 本書は、滋賀県が行なう県立河瀬高等学校新設工事に伴う馬場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は滋賀県教育委員会の指導により財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 本書は、昭和56年度に試掘調査、昭和57年度に発掘調査を実施し、昭和58年度に整理した成果である。
4. 調査および整理・報告は滋賀県教育委員会文化財保護課技師葛野泰樹が担当した。
5. 現地調査および整理・報告書作成は次の構成で実施した。

昭和56年度

調査員：山中仁志（京都産業大学O. B）

昭和57年度

主任調査員：徳網克己（財団法人滋賀県文化財保護協会嘱託調査員）

調査補助員：林 浩司、西川 健（佛教大学）、入野隆治、平塚充男（立命館大學）、中島美代子・小山みのり・馬場洋子・酒井彰子・須原久美子・徳毛ゆかり（京都女子大学）、北川ともえ（京都和装学園）

昭和58年度

調査補助員：林 浩司、吉備浩子（佛教大学）、小山みのり・中村康子・小倉美奈子（京都女子大学）、中島美代子（京都女子大学O. G）、北川ともえ（京都和装学園O. G）

なお、調査を実施するにあたり彦根市教育委員会技師本田修平氏の協力を得た。

6. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	外 池 忠 雄
〃 課長補佐	藤 本 英 策 (昭和56・57年度)
〃	松 浦 光 彦 (昭和58年度)
〃 管理係長	林 健次郎 (昭和56・57年度)
〃 〃 主査	将 亦 富士夫 (昭和58年度)
〃 埋文係長	九 山 竜 平
〃 〃 主査	近 藤 滋

(財) 滋賀県文化財保護協会

事務局長 江 波 弥太郎

事務主事　松本暢弘

7. 本報告書の編集・執筆は葛野が当り、第2章-2の昭和57年の日誌第4章-1は  
徳網が担当した。図面・遺物の整理には林 浩司、中島美代子、北川ともえ、小山  
みのりの尽力があった。遺物写真については寿福 滋氏の協力を得た。

## 目 次

はじめに.....	1
第1章 位置と環境.....	2
第2章 調査.....	8
1. 調査経過.....	8
2. 調査日誌(抄).....	9
第3章 遺構.....	12
1. 掘立柱建物.....	12
2. 土 塚.....	15
3. 溝.....	18
4. 河 川.....	18
第4章 遺物.....	19
1. 土 器.....	19
2. 木 器.....	37
3. 石 器.....	40
4. 土 製 品.....	40
第5章 まとめ.....	42

# 図版目次

- カラー図版一 1. 人形土製品  
2. 調査地遠景（南から）
- 図版一 1. 馬場遺跡遠景（北西から）  
2. 試掘調査状況
- 図版二 1. 第21グリット柱穴検出状況  
2. 第3グリット土層断面
- 図版三 1. Aトレンチ全景（北東から）  
2. Aトレンチ土層断面
- 図版四 1. BトレンチSR1（北東から）  
2. Cトレンチ全景（南から）
- 図版五 1. Cトレンチ（北東から）  
2. CトレンチSB1・2（南西から）
- 図版六 1. CトレンチSB9・10（西から）  
2. CトレンチSB6・7、SK3・4・6・7（東から）
- 図版七 1. Cトレンチ柱痕出土状況  
2. Cトレンチ柱痕出土状況
- 図版八 1. CトレンチSD1（南東から）  
2. CトレンチSD3（南東から）
- 図版九 1. CトレンチSD1遺物出土状況  
2. CトレンチSD1遺物出土状況
- 図版十 1. BトレンチSK1  
2. CトレンチSK8（南から）
- 図版十一 1. Dトレンチ全景（南西から）  
2. DトレンチSB13・SK20（北から）
- 図版十二 1. DトレンチSK20遺物出土状況  
2. EトレンチSR2（北西から）
- 図版十三 1. EトレンチSR2遺物出土状況  
2. Fトレンチ（北東から）
- 図版十四 出土遺物（SD1）
- 図版十五 出土遺物（SD1・掘立柱建物・ピット・SR1-a）
- 図版十六 出土遺物（SR1-a、SR1-b）

- 圖版十七 出土遺物 (S R 1 - b + S R 1 - c )
- 圖版十八 出土遺物 (S R 1 - c 石鑿、人型土製品)
- 圖版十九 出土遺物 (S D 1 , S D 1 )
- 圖版二十 出土遺物 (S D 1 , S R 1 - a )
- 圖版二十一 出土遺物 (S R 1 - a , S R 1 - a )
- 圖版二十二 出土遺物 (S R 1 - b 、環狀石斧、砾石)
- 圖版二十三 出土遺物 (木器)

## 挿 図 目 次

第1図 馬場遺跡位置図	2
第2図 馬場遺跡位置図および周辺の遺跡	3
第3図 馬場遺跡試掘グリット位置図および土壠柱状図	4
第4図 馬場遺跡測量図およびグリット・トレンチ位置図	5
第5図 Cトレンチ掘削状況	9
第6図 Dトレンチ遺構検出状況	9
第7図 B・Cトレンチ平面実測図	13
第8図 Dトレンチ平面実測図	16
第9図 SD-1平面実測図	17
第10図 SR1・SR2断面実測図	18
第11図馬場遺跡弥生土器型式分類(案)	20
第12図 出土遺物(SD1)	22
第13図 出土遺物(SD1)	23
第14図 出土遺物(SD1)	24
第15図 出土遺物(SD1、掘立柱建物・Pit)	25
第16図 出土遺物(SR1-a)	28
第17図 出土遺物(SR1-a)	29
第18図 出土遺物(SR1-a、SR1-b)	30
第19図 出土遺物(SR1-b)	31
第20図 出土遺物(SR1-b)	32
第21図 出土遺物(SR1-b)	33
第22図 出土遺物(SR1-c)	34
第23図 出土遺物(SR1-c、DトレンチSX1、ミニチュア土器)	35
第24図 出土遺物(木器)	38
第25図 出土遺物(人型土製品、石器)	39

## はじめに

本調査は、県立河瀬高等学校新設工事に伴う馬場遺跡の発掘調査である。当遺跡はこれまで未周知であったが、当地の南西約500mから縄文土器の出土が伝えられており、昭和55年度には南西隣接地において彦根市教育委員会が立ち会い調査を実施した結果、河川跡らしき遺構とスクモ層および数点の遺物を確認した。その時点においては遺跡であることは明確ではなかった。

昭和56年10月高校建設工事に伴い当該地において遺跡確認調査を実施した。その結果、弥生時代から平安時代の遺物を採取したことから「馬場遺跡」とし、事前に試掘調査を行なうこととした。

試掘調査は、同年12月工事予定面積約40,000m<sup>2</sup>に36個の試掘グリットを設定し遺構の有無・範囲・性格等を追求した。その結果、当該地の西側約20,000m<sup>2</sup>にかけて弥生時代中期から後期の遺物包含層と柱穴・溝等を検出した。馬場遺跡は弥生時代の大集落跡である可能性が強くなり、湖東地方における弥生時代の動向を明らかにする貴重な遺跡であることが判明した。このことから、学校建設事業部と再三協議を重ね、遺跡の中心部はグランドとして保存し、校舎は遺構のない南東側に建設することになった。

発掘調査は、遺跡の性格等を明らかにする目的で遺跡の中心部分と推定される約3,500m<sup>2</sup>を対象として昭和57年4月から6月まで実施した。

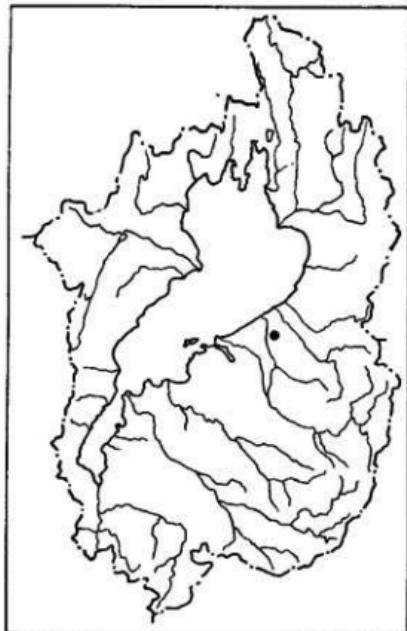
調査は文化財保護課が同教委総務課より予算（試掘調査500,000円、発掘調査8,880,000円、整理2,477,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。

## 第1章 位置と環境

馬場遺跡は滋賀県彦根市川瀬馬場町 608他に所在し、湖東平野の北部を西流する大上川と宇曾川にはさまれた沖積平野に位置する。西方には独立丘陵荒神山があり、宇曾川は荒神山の東側で大きくカーブし琵琶湖へ流れている。このことから、当地周辺は後背湿地帯であったとみられ、グライ層、スクモ層の堆積をみる。また、湧水地帯でもある。標高は約92mを測り琵琶湖の比高差は約7mであることから、琵琶湖の水位の増減に対し真に影響を受けていたと推測できる。

現在、当該地は水田として利用され、その畔はいわゆる大上郡条里制地割に合う。当地も最近の宅地開発の波に乗り、水田も少なくなってきた。

ここで、周辺に位置する弥生時代の遺跡分布をみてみよう。馬場遺跡の北西約3km



第1図 馬場遺跡位置図



第2図 馬場遺跡位置図および周辺の遺跡

弥生時代

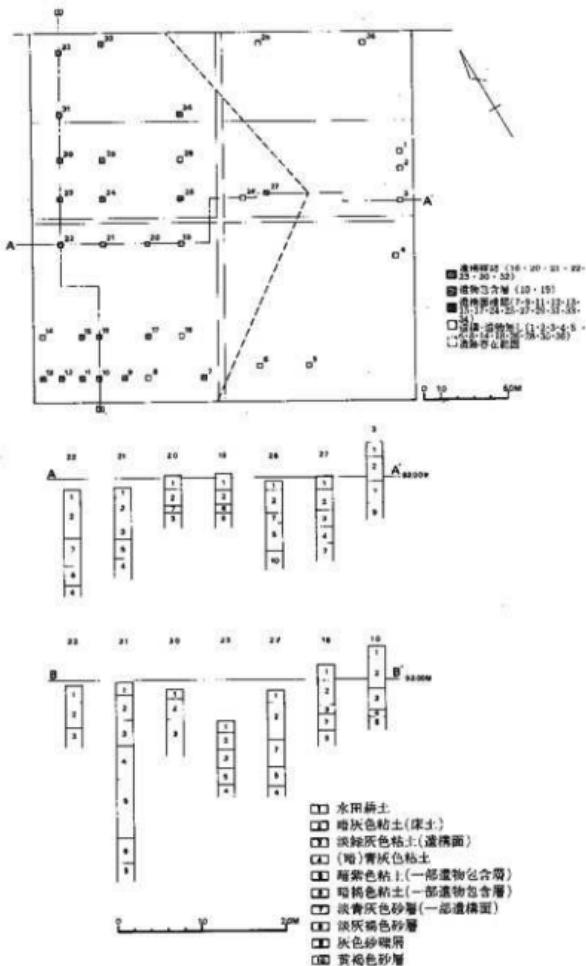
- |          |           |         |
|----------|-----------|---------|
| 1. 馬場遺跡  | 2. 紗羅寺遺跡  | 3. 稲部遺跡 |
| 4. 稲里遺跡  | 5. 上岡部B遺跡 | 6. 金田遺跡 |
| 7. 曾根沼遺跡 | 8. 石寺遺跡   |         |

古墳時代

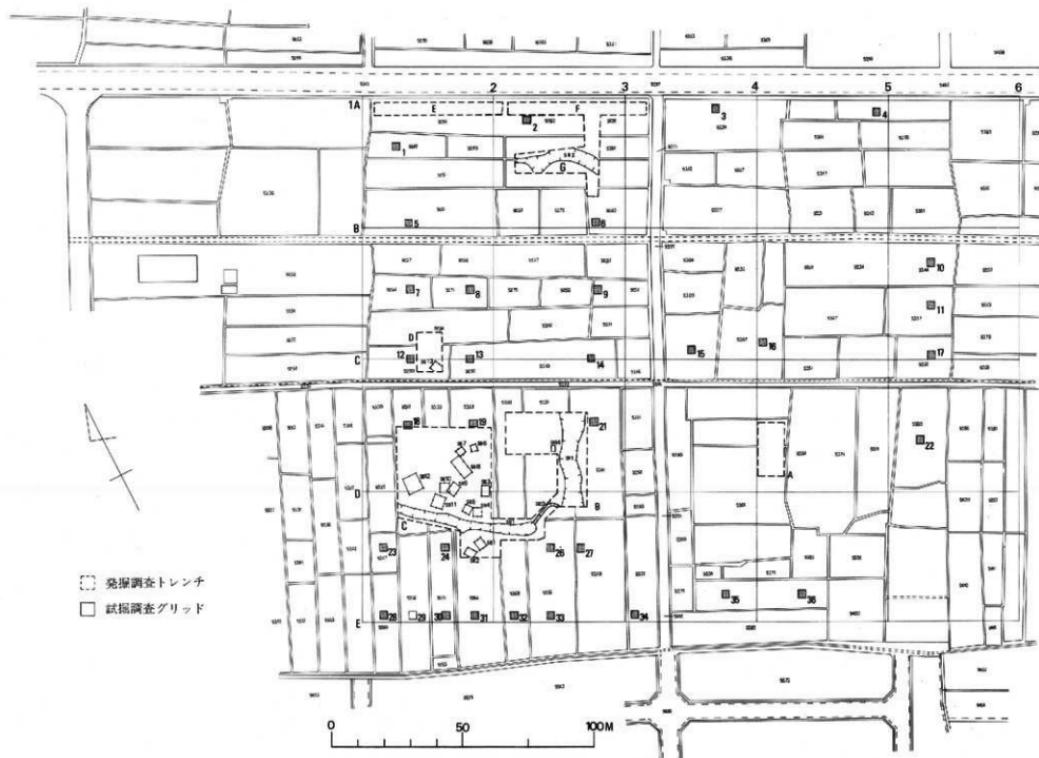
- |          |            |            |
|----------|------------|------------|
| 9. 桃山古墳  | 10. 下岡部西遺跡 | 11. 日塚古墳   |
| 12. 岩神古墳 | 13. 荒神山古墳群 | 14. 楠樂寺遺跡  |
| 15. 烏龍古墳 | 16. 南川瀬古墳  | 17. 堀町横地古墳 |
| 18. 出路古墳 |            |            |

奈良時代以降

- |                 |           |           |
|-----------------|-----------|-----------|
| 19. 星中寺廃寺       | 20. 普光寺廃寺 | 21. 宝石寺遺跡 |
| 22. 姫寿寺廃寺       | 23. 国昌寺廃寺 | 24. 宝山寺廃寺 |
| 25. 曾根沼西(瓢流莊)遺跡 | 26. 恒河寺廃寺 | 27. 後堂廃寺  |



第3図 馬場遺跡試掘グリット位置図および土層柱状図



第4図 馬場遺跡測量図およびグリッド・  
トレンチ位置図

の荒神山北側には妙楽寺遺跡がある。当遺跡は弥生時代後期から平安時代にいたる複合遺跡で、当遺跡と立地状況が似ており、また、位置的にも注目される遺跡である。宇曾川左岸には福部遺跡<sup>②</sup>、福里遺跡、上岡部B遺跡、金田遺跡の4遺跡が1.5から4kmの距離をもって方形に立地し、さらに、荒神山西側には曾根沼遺跡があり、荒神山山麓の石寺遺跡は銅鐸の出土地として伝えられている。このように、当遺跡を含めて荒神山を中心にして、半径5kmの円内に弥生時代中期以降の遺跡が立地する。

古墳時代では、旧愛知川自然堤防上の彦根市彦富町から上西川町にかけて集落跡をみる。馬場遺跡の近くには集落跡はまだ確認されていない。古墳は荒神山の山腹に26基の円墳が確認されている。平地では、当遺跡から東方約2.7kmの南川瀬遺跡、同4.2kmの萬籠遺跡の両古墳と、北東約3kmの堀町横地遺跡から古墳の痕跡が報告されている。これら3基の古墳は標高100mラインより上位に位置し、それより下位には古墳はないといわれている。彦根市教育委員会では本年彦根市の南部を詳細に分布調査を実施しておりその結果がまたれる。

奈良時代以降になると岡部町に屋中寺廃寺、普光寺町に普光寺廃寺があり、ともに白鳳期創建と伝えられている。荒神山東側山腹には延寿寺遺跡やその東方の丘陵上に国昌寺遺跡があり、宇曾川右岸にも宝山寺遺跡が分布する。さらに、注目される遺跡として、東大寺領観流莊が荒神山西側に拡がる<sup>③</sup>。

このように、荒神山を中心とした当地は、縄文時代からの遺跡が連続と受けつかれ、文化財の宝庫といつても過言ではない。

## 第2章 調査

### 1. 調査経過

昭和56年度に実施した試掘調査は、約3m四方のグリットを10~60m間隔で36個設定した。遺構は当該地の西側にあり、現水田面下0.5~0.7mの標高約92.5mにある淡緑灰色粘土層をベースとしている。東半部はスクモ層・グライ層および青灰色砂層の堆積地帯で、特に湧水が著しく遺構は検出されず、わずかに遺物の出土をみる。

本調査は高校建設に伴う地形測量基準点No.0（当該地北西隅）を0点とし、同No.1・No.2を結ぶラインを基準に50m間隔に割り付けをした。0点から南へはA・B・C……、東へは1・2・3……と大区を定め、大区をさらに5m方眼の小区に割り付けた。

調査地区は試掘調査に基づき、遺構の中心部分とみられるところと、一部校舎および排水路の設置されるところにトレントを7本設定した。各トレントは便宜的にA~Gトレントと番号を付け、遺構の拡がりにより拡張することとした。ちなみに、

Aトレント——4C区

Bトレント——2C・2D区

Cトレント——1C・1D・2D区

Dトレント——1B・1C区

Eトレント——1A・2A区

Fトレント——2A・3A区

Gトレント——2A

となる。Aトレントは青灰色粘土・スクモ層の堆積地帯で遺構は検出されなかった。Bトレントからは南北方向にのびる河川跡と柱穴を検出した。河川跡には多量の上器と木片が包含される。Cトレントからは東西方向にのびる溝とその両側から多数の柱穴を検出した。溝内には多量の七器片があり、柱穴からは数株の建物を想定することができる。柱穴には柱根の遺存するものもある。馬場遺跡の中軸部とみられるところである。Gトレントからは東西方向にのびる河川跡を検出した。しかし、Bトレントの河川跡のように遺物はあまり包含されない。ただ、板状の木製品の出土をみた。

今回の調査では弥生時代中期から後期にいたる遺物・遺構を検出したのであるが、遺跡確認調査で採取した平安時代の遺物に伴う遺構は検出されなかった。弥生時代以外の遺物は上流から混入したものか、後世の水田經營に伴ないも込まれたものか明らかではない。

## 2. 調査日誌（抄）

昭和56年

- 10月8日 遺跡確認調査を実施する。弥生時代から平安時代の遺物を採集し、馬場遺跡とする。
- 12月21日 本日から試掘調査を開始する。バックフォーを導入し約3m四方のグリットを掘削。No.1~13掘削。No.7~13にて遺物包含層および遺構面を検出。出土遺物は弥生土器である。
- 12月22日 No.14~22掘削。No.16、20~22から柱穴多数検出。No.19からは弥生土器と木片が多量に出土する。
- 12月23日 No.23~30掘削。ほぼ全グリットから遺構面を検出。No.23、30は特に柱穴が多い。
- 12月24日 No.31~36掘削。No.31~34に遺構面を検出する。
- 12月25・26日 各グリット測量。埋め戻し作業。

昭和57年

- 4月19日 彦根市河瀬馬場遺跡の発掘調査を開始する。テントの設営、発掘調査資材の搬入後、発掘調査前の遺跡全景写真を撮る。56年12月に試掘調査を行なっており、適切な場所にA~Fレンチを設定する。
- 4月20日 基準点を定めてこれを中心に測量を行なう。
- 4月21日 バックホーで掘削作業を始める。Aレンチの表土剥ぎから行ない徐々に掘り下げていく。地層は、耕土、床土、淡灰緑色粘質土となる。
- 4月22日 淡灰緑色粘質土からは、遺構は検出されず、下層の暗青灰色粘土層まで掘り下げる。
- 4月23日 暗青灰色粘土層からも遺構は、検出されず、当初予定されていたAトレンチの面積を半分に縮小する。湧水が激しくなる。



第5図 Cトレンチ掘削状況



第6図 Dトレンチ遺構検出状況

- 4月24~27日 Aトレンチの全景、断面写真撮影。Bトレンチの掘削を始める。耕土、床土、灰青色粘質土層で遺構面は、耕土下 0.4m の灰青色粘質土層である。トレンチの東端に S R1 の西側の河川跡と柱穴数個を検出する。S R1 は、南北に流れており、幅 5m 、深さ 0.3m と浅く、柱穴は暗灰色粘質土である。
- 4月28日 Cトレンチの掘削を始める。耕土下 0.4m に青灰色砂礫層の地山に S D1 の淡黒褐色泥砂が掘りこまれている。弥生時代後期の上器を含んでいる。
- 4月29日 Dトレンチの耕土除去作業
- 5月3日 Aトレンチの埋め戻し作業。雨が激しく降り重機による埋め戻しは難行を極める。
- 5月4日 Cトレンチの S D1 は、幅 3m 、深さ 0.3m を削り、この南側には直径約 0.2~0.3m の灰黑色粘質土の柱穴 10 数個を検出する。
- 5月5日 Dトレンチの遺構検出作業。灰黑色粘質土の柱穴が数個検出され、少量の弥生土器片が出上する。
- 5月6日 Cトレンチ S D1 を 5 区画に分割し、セクションを設け掘り始める。東壁断面図の実測
- 5月7~12日 Cトレンチ S D1 の掘り下げ、溝内の遺物出土状況写真。非常に暑い日が続き気温は、30°C を越す。
- 5月13・15日 Dトレンチの精査作業。遺構面は、耕土下 0.4m の灰青色粘質土だがトレンチの北端では、灰色砂礫層になりここには遺構なし。
- 5月17日 Dトレンチの精査を行ない、弥生時代後期の掘立柱建物 1 棟と溝状遺構 1 条を検出する。
- 5月18日 Dトレンチの掘立柱建物の規模を確認するためトレンチの拡張を行なうが、柱穴は検出できず。
- 5月19日 Cトレンチ南部の精査を行ない、柱穴を掘り下げる。
- 5月20・21日 Cトレンチ S D1 の東延長部を拡張する。S D1 は、ゆるくカーブし次第に溝幅は狭くなってとぎれる。
- 5月22日 Bトレンチの S R1 の東側に新たに溝が検出され、北南にトレンチを広げる。
- 5月24・25日 C、Dトレンチの平面実測 (S=1/20)  
Eトレンチの掘削を行なう。遺構は、検出されず耕土、床土、淡灰緑色粘質土となる。
- 5月26日 重機をもう一日稼動させ Cトレンチの北側の拡張を行なう。多数の柱

穴と土塙を検出。柱穴は、柱根をもつものがある。

- 5月27~29日 B、Cトレンチの測量、杭打ち。BトレンチSR1の外形を検出する。  
一定区画ごとに掘り下げ遺物を取り上げていく。両方の溝内には、暗茶褐色泥砂が堆積しており、弥生時代第IV様式併行期の土器（壺、甕、鉢、高杯など）を多量に包含している。SR1は、南北に流れる自然流路と思われトレンチ北部と南部で二つに分岐する。南西部の支流（幅1~2m）では、暗灰色粘質土に多量の壺、甕などが出土している。
- 5月30日 BトレンチSR1の南部は、溝も浅くなってしまっており遺物も少量である。  
溝の東側は、柱穴が検出されなかつたが西側では、柱穴と土塙が検出されている。SK1は、井戸跡の可能性がある。
- 5月31日 Cトレンチの柱穴、土塙の掘り下げ。Fトレンチの掘削。幅5~6m、  
深さ0.3mの東西に流れる自然流路を検出する。この溝も暗茶褐色泥砂で遺物は出土せず。
- 6月3~5日 Cトレンチの平面実測(S=1/20)、SD1より砥石出土。SD2は、淡灰青色砂質土（小礫を含む）で、幅1~2m、深さ0.2mを測り曲折する。弥生時代中期の土器小片を含み、SD1とは統かず切られている。
- 6月6日 Cトレンチの平面実測終了(S=1/20) 遺物の取り上げ。南西部のSK11より鋤先が出土する。
- 6月7・8日 Bトレンチの平面実測(S=1/20)  
大型カメラでCトレンチの全景写真撮影
- 6月9~12日 E、Fトレンチの平板実測(S=1/100)  
FトレンチのSR2は、西側で幅が狭くなり2つに分かれ。流路内より少量の弥生時代中期の土器片と人足、板状木製品などが出土する。  
B、Cトレンチの埋め戻し開始
- 6月14日 バリケード・看板の撤去、発掘調査用具の運搬、本日にて現地調査終了。来年の春には県立河瀬高校が開校し、馬場遺跡は、グランドの下に眠り続けるだろう。以後整理作業に専念する。

### 第3章 遺構

本調査において検出された遺構は掘立柱建物14棟、土塙22基、溝3条、河川3条などである。掘立柱建物、土塙、溝はB・Cトレンチを中心に検出したもので、この付近が遺跡の中核部にあたると思われる。

#### I. 掘立柱建物

全体に柱穴の残りは良好とはいえず、柱筋の揃う、また、すべての柱穴が遺存する建物は少ない。柱穴は0.2~0.3mの平面円形を呈するものが大部分で、中に柱痕の残るものもある。柱穴の遺存深度は0.05~0.2mである。ここでは、比較的柱筋の揃う柱穴を抽出して建物跡と推定したため、中には建物として建たないものも含まれるかもしれない。しかし、他に多数の柱穴を検出していることから、ここに上げた以上の建物があったともいえる。

S B 1 S D 1 の南西約4mから検出された桁行1~3間(3.5~3.8m)、梁行1~2間(3.0m)の建物である。床面積は10.95m<sup>2</sup>を測る。建物群の中では比較的まとまった建物である。

S B 2 S B 1 の西約2mにあり、主軸を大きく西に振る。桁行、梁行とも1間で、梁行の北側柱列のみ2間になる。規模は1辺約2.1mを測り、約4.3m<sup>2</sup>の床面積をもつ。当建物の北側には柱穴が3個並び、S B 2 をもう少し大きく考えることも可能である。そうすると、桁行2間(4~4.6m)、梁行1~2間(2.6m)になる。

S B 3 S D 1 の北東約10mにある桁行1~2間(3.4~3.7m)、梁行1~2間(2.3~2.7m)の規模をもつ建物である。

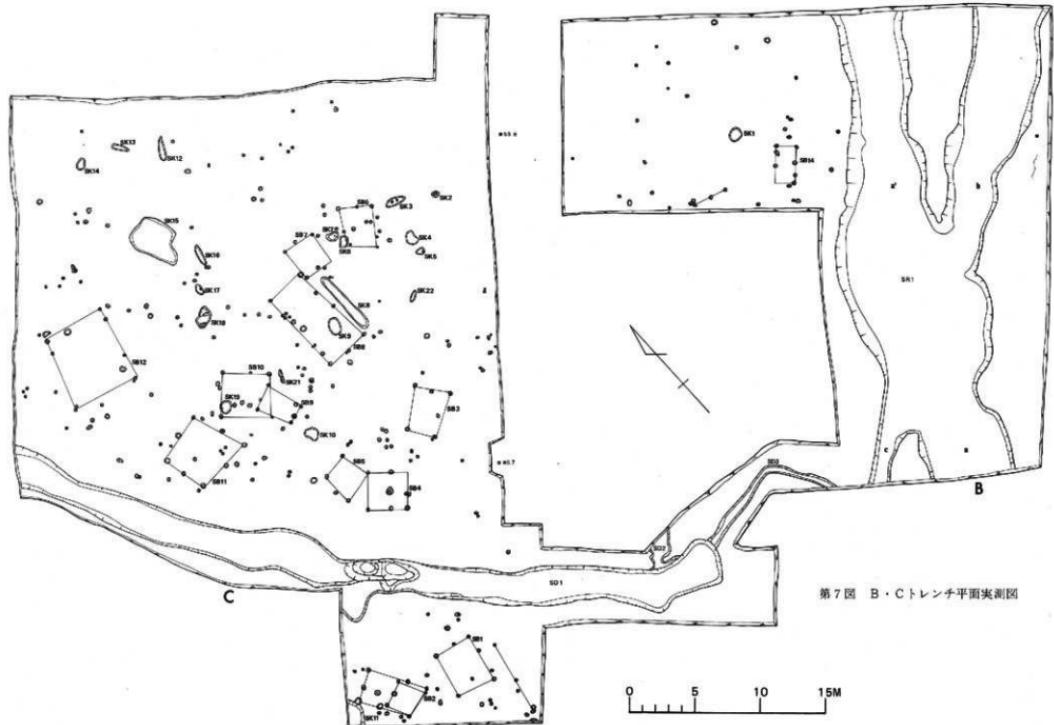
S B 4 S D 1 と平行する建物で、桁行2間(3.0m)、梁行2間(2.9m)、床面積8.7m<sup>2</sup>を測る。平面形は正方形に近く、建物の中央にやや大きな柱穴をもつ。建物の南西コーナーの柱穴に柱根が残る。

S B 5 S B 4 の北側と接する建物で、南東コーナーの柱穴はS B 4 と重複する。桁行1ないし2間(2.4~2.6m)、梁行1間(2.1~2.7m)で、S B 4 を縮少させた規模である。

S B 6 S B 3 の北東約12mにある建物で、桁行2間(3.0~3.2m)、梁行1~2間(2.3~2.6m)、床面積7.6m<sup>2</sup>を測り、平面台形を呈する。建物の北西柱列とSK 6 とが重複し、周囲にも多数の土塙や柱穴がある。

S B 7 S B 6 の北西に隣接する建物で、桁行1間(2.6~2.7m)、梁行2間(1.7~2.5m)の規模をもち、平面台形を呈する。

S B 8 S B 7 の西側にある平面長方形の建物で、桁行3~4間(6.8m)、梁行



第7図 B・Cトレンチ平面実測図

1・2間（3.0・3.5m）、床面積22.1m<sup>2</sup>を測る。西側柱列は多数の柱穴が不揃いながら並び、建物内と建物の東側に土塙SK8・9がある。特にSK8は建物と平行する楕円形の土塙である。なお、SB6～8は互いに隣接し、L字形の配置関係にある。

SB9 SD1の東約10mに位置し、SB10と重複する建物である。桁行1間（2.8～3.0m）、梁行2間（1.6・2.0m）、床面積5.22m<sup>2</sup>の規模をもつ。南側妻柱には柱根が残る。

SB10 SB9と重複する建物であるが、前後関係は明らかではない。桁行1～2間（3.4m）、床面積12.73m<sup>2</sup>を測る。平面形は正方形に近く、建物内に土塙SK19がある。建物南東コーナーの柱穴に柱根が残る。

SB11 SB10の西側に位置し、SD1と平行する建物である。桁行2間（4.0～4.5m）、梁行2間（3.7～4.4m）、床面積17.21m<sup>2</sup>を測る。建物内や周辺に多数の柱穴があり、柱根の残るものもあることから、他に建物が存在していたのであろう。東側柱列から南方のSB5へ柱筋を備えた棚状の柱穴を見る。

SB12 SB11の北約6mにある建物で、今回検出した建物の中では最も規模の大きいものである。桁行2～3間（6.8m）、梁行1～2間（4.8～5.4m）、床面積34.68m<sup>2</sup>を測る。建物北東コーナーの柱穴に柱根が残る。

SB13 Dトレンチから検出した。桁行1間以上（2.4m以上）、梁行2間（5.5m）を測る。ただ、梁行が1間（2.7m）の可能性もある。梁行1間とするとSB8と似ることになる。

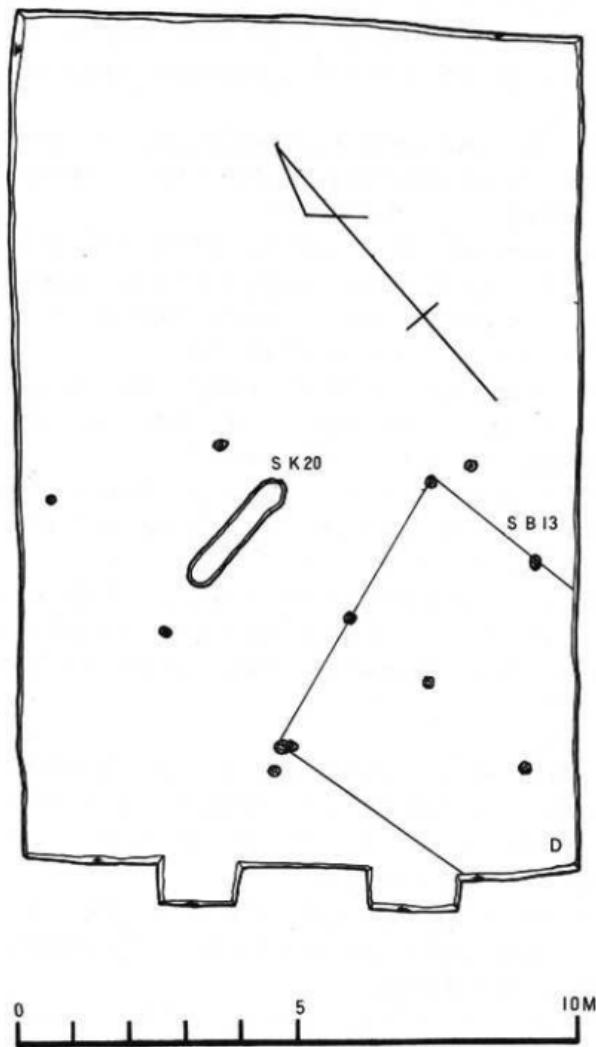
SB14 Bトレンチから検出した建物で、河川SR1-aと平行する。桁行3間（2.9m）、梁行1間（1.5m）、床面積4.35m<sup>2</sup>の規模をもつ。高床倉庫の形態を呈する建物である。なお、この建物の北側から数個の柱穴を検出したが、建物としてまとまるものはない。

## 2. 土 塙

円形、楕円形、隅丸方形とそれに近い形状を呈するものを合計22基検出した。大きさは円形で直径0.5～1.0mあり、楕円形では長辺0.9～5.2m、短辺0.3～0.9mを測り、楕円形の土塙に大小が認められる。深さは最も浅いもので0.04cm、深いもので0.53mあり、0.1m前後の深さが多い。

この中でSK2～5・22、12～14、16～18がそれぞれ群を形成し、SK8と20の楕円形の土塙は建物と平行する。SK1は平面円形を呈し、深さは今回検出した土塙の中では最も深く井戸の可能性がある。

大部分の土塙からは土器片が少量ながら出土し、丸太片などの木片も出土する。特にSK11、20には多くの丸太片がある。しかし、製品として加工されたものはない。



第8図 Dトレンチ平面実測図

### 3. 溝

S D 1 Cトレンチから検出された溝で、建物群の中央部を南東から北側へゆるくカーブをえがきながら北西方向へのびる。南東端は検出されたが、北西側は調査対象地外へのび明らかにすることはできない。延長55m以上、幅は1.8~3.0mで、S B 5付近で少し陀行し幅が広くなる。深さは最深部で0.3mを測り、断面U字形を呈するが底部はほぼ平坦に近い。

溝内には小木片とともに多量の土器が堆積する。土器はすべて細片で、層位的な堆積はせず、一括的に堆積する。出土量はS B 4からS B 11に平行する部分が最も多い。S D 1の南東端にはBトレンチからつづくS D 3があり、その北側にS D 2がある。

S D 2 S D 1の南東端近くにある溝で、S D 1から北東方向へのびる。S D 1と接点は狭く0.7mの幅で、それより約1mのところから広くなる。

S D 3 S D 1の南東端にとり付く溝である。Bトレンチから北西方向へのび鈍角的に西方へ屈曲しS D 1に付く。南東端は未検出であるが、おそらく河川S R 1-cに付くと思われる。長さは約13mを測り、S R 1-cに付くとすれば約15mである。幅は0.4~0.9mあり、地形の傾斜を考えればS R 1-cからS D 1へ水を取り入れた用水路とみることができる。

### 4. 河 川

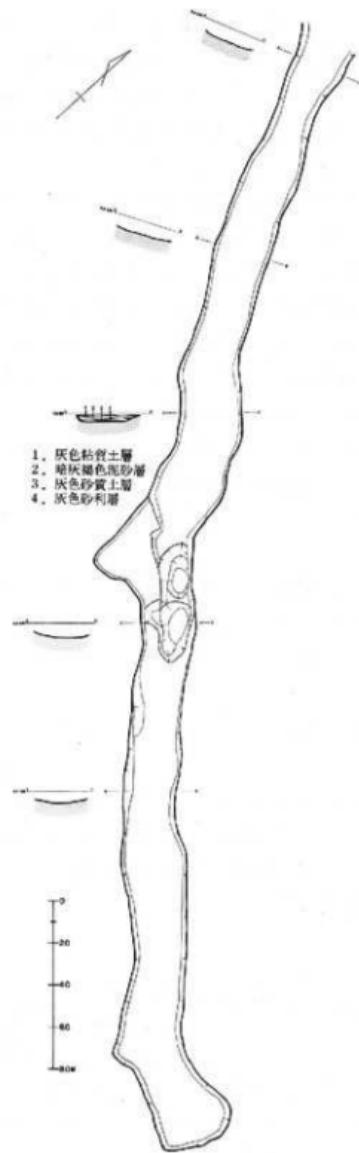
S R 1 Bトレンチから検出したもので、トレンチの中央部でX状に交叉する。本流はa-a'を示したものと思われ、南西から北東へ流れる。幅は交叉部で10.5m、a-a'で6.5m、a'-a'で4.5~6.0m、b-b'で4~5.5m、c-c'で1.5mを測り、深さは最深部で約0.5mである。

河川内からは多量の土器が出土し、また、流木、アシ系の葉、木ノ実等の植物遺体も多く含まれる。

S R 2 Gトレンチにある河川跡で、南東から北西方向へカーブをえがきながらのびる。さらに、北西方向へ幅を狭めた小河川がのびる。埋土は褐色系粘土であり、S R 1でみられたような土器の堆積ではなく、少量出土するのみである。しかし、丙穴をもつ板等の木製品が出土する。



第10図 S R 1・S R 2断面実測図



第9図 SD-1 平面実測図

## 第4章 遺物

遺物は土器、木器、石器、土製品等がある。中でも土器の出土量は多く、コンテナに50箱はある。また、特異な遺物として人型土製品があり、弥生時代の祭祀を裏づける資料として注目される。出土遺物の大部分はSD1、SR1に集中する。

### 1. 土器 (第12~23図、図版十四~二十二)

今回の調査では多量の弥生土器の出土をみた。完形品ではなくすべて破片で、実測可能なものは約300点を数え他は細片である。ここでは遺構に伴い出土した比較的の遺存度の良い約200点について記述する。その前に、土器の形態変化、特徴に基づき、下記のように分類を行ない、各遺構出土の土器をこの分類に準じて述べてみたい。

出土土器の器種は、蓋、壺、甕、高杯、鉢と壺、甕、鉢の底部である。底部については一括する。

#### 弥生土器形式分類 (案) (第11図)

- 蓋 A 天井部にくぼみをもち、裾部は八字状に開く。
- 壺 A1 上外方にのびる口縁部が直立するもの。受口状口縁を呈する。  
A2 頸部が直立してのびたのち外方へ開き、屈曲し上方へのびる。  
B1 口頸部はゆるやかに外上方へのび、口縁部が肥厚する。  
B2 頸部は細く、口縁部が直立するかやや内傾する。  
B3 頸部が上方へ外反しながらのび、口縁部は短かく、内傾する。  
B4 口頸部は外上方にのび、口縁端部は直立する。  
B5 やや内傾する頸部に外反する短かい口縁部をもつ。  
C1 口頸部は外方へひらき、端部は面をもつ。  
C2 口縁部はゆるやかに屈曲し、端部は面をもち垂下する。  
C3 口頸部は外上方へのびたのち、端部は上方へ肥厚さす。  
C4 口頸部は大きく外反し、口縁部内面に粒状突起をもつ。  
D 頸部は直立してのびたのち、口縁部は水平に開く。  
E 口頸部はよく外反し外上方へのびる。  
F 口縁部がよわく外反する。  
G 口縁部の欠失するものである。
- 甕 A 外反する口頸部の端部を直立さずか内傾さす。いわゆる近江型受口状口縫を呈するものである。  
B1 口頸部は外上方へのび、よわく屈曲し直立する。  
B2 外上方へのびる口頸部の端部をわずかに屈曲させ外反する。



第11図 馬場遺跡馬生土器型式分類(案)

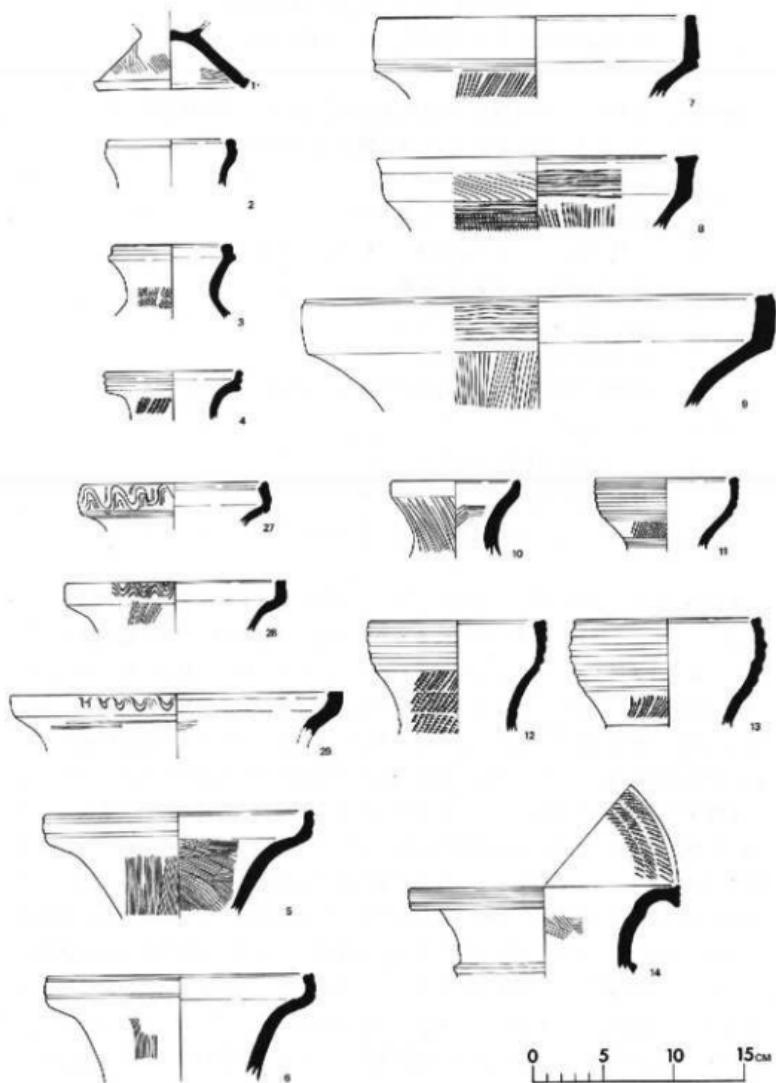
- C く字状に屈曲する口頸部の端部に面をもつ。
- D 水平に開く口縁部をもつ。
- E 外上方にのびる口縁部の端部を屈曲させ内傾する。
- F 口頸部は外反しさらに外上方へ少し屈曲する。

- 高杯A 水平にのびる口縁部の端部を下方に屈曲さす。Aは杯部である。
- B1 ゆるやかに外反するラッパ状の脚部で、拵はよく開く。
  - B2 脚端部は強くふんばる。
  - C 外下方に下り、端部は少し外方に開く。
  - D 小型の脚部で、水平に接地し、柱状部は身入りである。
  - E 外下方に開き、端部はやや細くなる。
- 鉢A 口縁部はゆるやかに内側する。
- B 口縁部は屈曲し水平に開く。
  - C 体部は球状を呈し、口縁部は外上方にのびる。
- 底部A 平底の底部である。
- B 底部中央を上げ底状にする。
  - C 底部穿孔のもので、A・B両者ある。
- ミニチュア七器 手づくねと小型の壺・甕類がある。

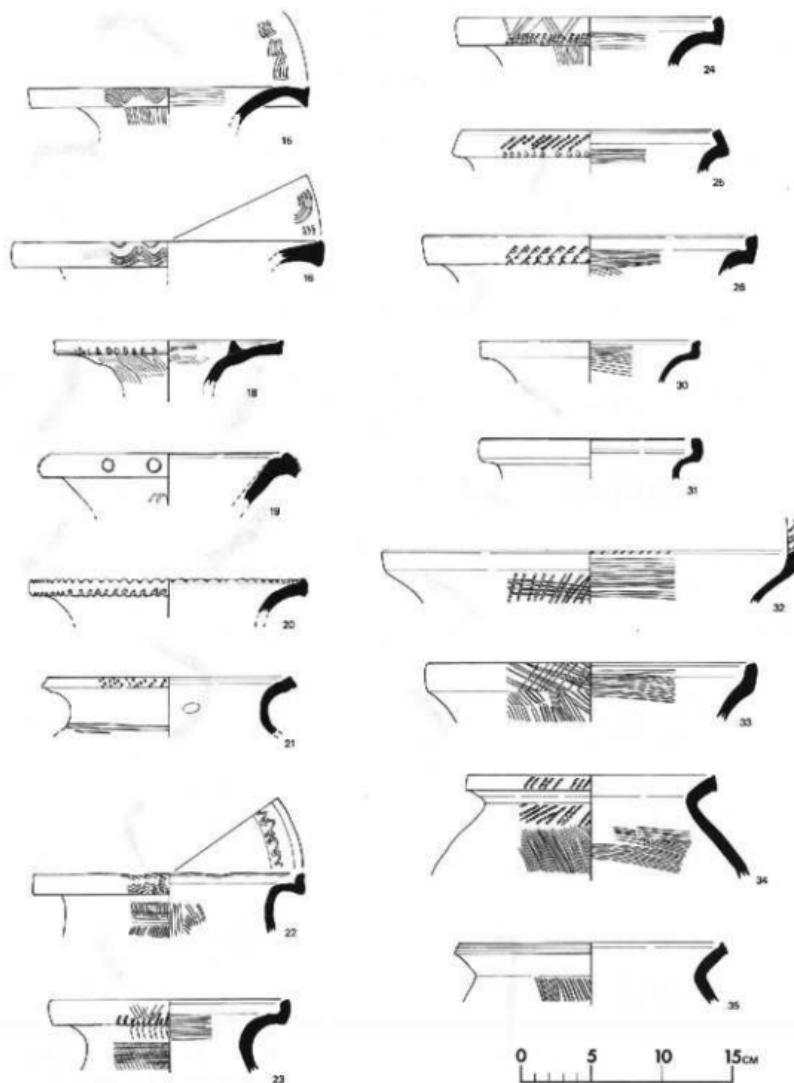
S D I 蓋1、壺22、甕22、高杯8、鉢4、底部12の出土を見る。

〔蓋〕 A (1) 頂部に上方へ開くつまみをつける。口径10.6cm。淡灰色を呈する。

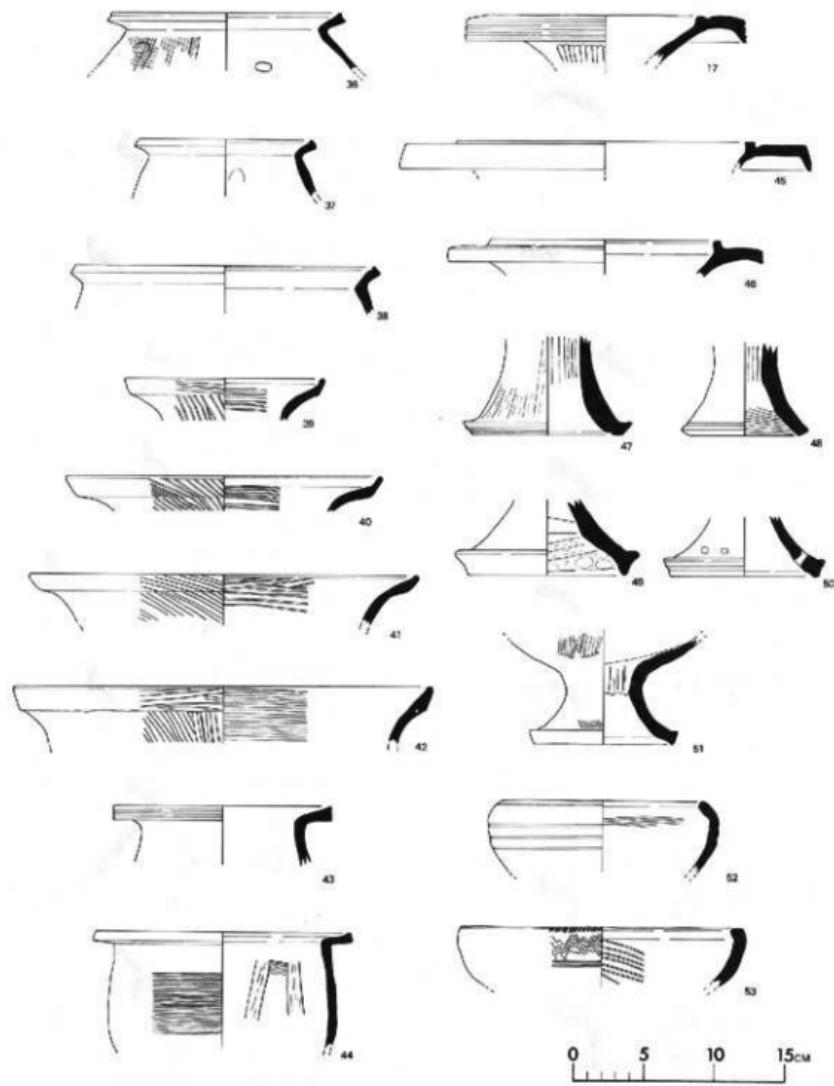
〔壺〕 A 1 (2~4)、A 2 (5~9・27~29)、B 1 (10)、B 2 (11~13)、C 1 (14・15・18)、C 3 (16・19~21) がある。2~4は口縁部外面に凹線をもち頸部にハケ目調整や列点文を施す。内面はナデ調整である。5~6は受口状口縁部の外面に2条の凹線をめぐらし、頸部の内外面をハケ目調整かナデ調整を施す。8~9は口縁部外面に凹線をみないが、ハケ目調整をする。27~29は口縁部外面に波状文を施す。A型式はいわゆる近江系の受口状口縁を呈するものである。B 2 (11~13)は口縁部外面に5~6条の凹線と、その下部に櫛描列点文を施す。頸部にも列点文をみる。内面はナデ調整である。12は頸部の櫛描列点文を3段に重ねて施文する。口径12.3cmで赤褐色を呈する。13は口径12.8cmを測り、淡赤褐色である。12・13とも胎土は緻密である。14は頸部に断面三角形の突帯をもち、口縁部外面に凹線、内面に櫛描列点文を施す。暗赤褐色を呈する。15~16は口縁部外面に波状文、内面に扇形文を施す。18は口縁部外面下端に刻み目、内面に瘤状突起をつける。20は口縁部の上下端部に刻み目を入れる。灰橙褐色を呈する。



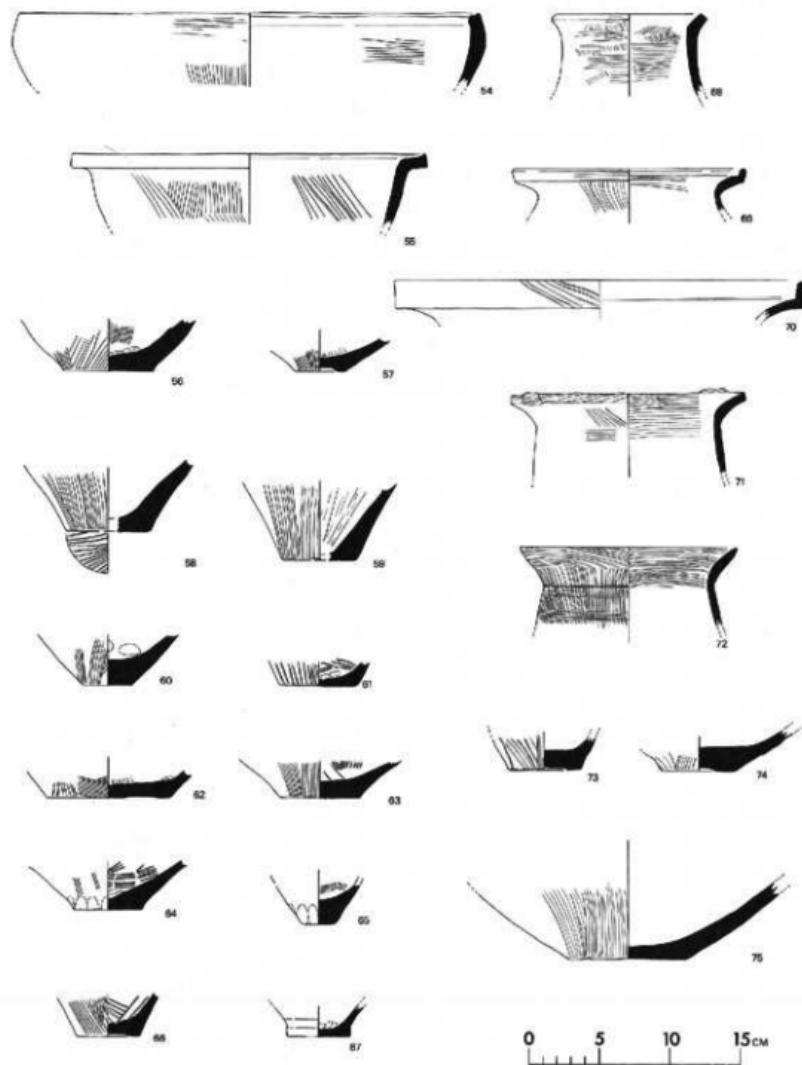
第12図 出土遺物 (S D 1)



第13図 出土遺物 ( S D - 1 )



第14図 出土遺物 (S D 1)



第15図 出土遺物 (S D 1、掘立柱建物・Pit)

〔甕〕 A (22・26・30・31)、B 1(32・33)、B 2(39～42)、C (34～38)、D (43～44)がある。受口状口縁を呈するA型式が最も多く出土する。22は口縁内外面に波状文を施し、23～25は列点文を施す。32は口縁端部上面に刻み目を入れる口径29.6cmの大型品である。34はく字状に屈曲する口頭部の外面に櫛描列点文とハケ目調整を、内面にハケ目調整を施す。39～42は受口状口縁に近く、内外面にハケ目調整を施す。43・44はL字状に屈曲する口縁部をもち、43は外面に擬凹線に入る。

〔高杯〕 A (17・45・46)、B 2(49～51)、D (47・48)がある。17は口縁部外面に3条の凹線を、体部にヘラ磨きを施す。口径20.0cmを測り灰褐色を呈する。45は口縁部外端面を垂下させる。46は垂下しない。45は体部の外面をハケ目調整する。50は脚部に2個1対の小円孔を穿ち、端部に擬凹線をめぐらす。51は短い脚部に球形の体部をもつものと思われ、体部外面下位をヘラ磨きする。内面にはしばり痕をみる。

〔鉢〕 A (52～54)、B (55)が出土する。A型式は無頸壺の可能性もあるがここでは外としておく。52は体部外面に3条の凹線をもち、53は口縁端部外面に刻み目、その下位に波状文とハケ目調整を施す。55は体部内外面をハケ目調整する。

〔底部〕 A (56・58～65・67)、B (57・66)がある。底部からでは器形の全体構造をとらえがたく、底部の形態によって分類した。58は底外面向にハケ目調整を施す。65は外面に指圧痕が明瞭に残り、底径2.4cmと小さく手づくね風の上器である。淡褐色を呈する。

掘立柱建物及びPit 壺1、甕4、底部3点の他細片が多量に出土している。

〔壺〕 B5(68)がある。内外面をハケ目調整する。灰褐色を呈し胎土は粗い。

〔甕〕 A (69・70)、C (71・72)がある。71は輪花状になる口縁部をもつ。口径16.6cm、灰褐色を呈する。72は口縁内外面をハケ目調整し、体部外面は斜方方向のち縫方向の2重ハケ目を施す。内面はヘラ削りする。暗灰褐色を呈する。

〔底部〕 A (75)、B (73・74)がある。75の底部径は9.5cmを測り、橙褐色を呈する。

S R I - a 壺13、甕10、高杯3、鉢1、底部14点などが出土した。

〔壺〕 A2(76～82)、C 1(83～86)、E (90・91)がある。78・79は口縁部外面の上下に各1条の凹線をめぐらせ、その間に粗い波状文を施文する。80は頭部に貼り付け突帯をもち、口縁部外面に櫛描列点文を施す。A 2の胎土、焼成は良く、橙褐色系である。C 1は口縁端部に数条の凹線をめぐらせ、83は凹線部に円形浮文を内面に粒状突起をつける。85は口縁部内面に波状文、櫛描列点文、刺突文を施す。

〔甕〕 A (92・93・95)、B 1(94)、C (87・88・96～100)、D (89)がある。87は口縁部内外面をハケ目調整し、端部外面に刻み目を入れる。88も同じ調整である。胎土に砂粒を多く含む。淡灰褐色を呈する。94・95は口縁部内外面をハケ目調整する。

外面のハケは粗い。口径は30cmを起す。暗茶褐色を呈し、外面にススが付着する。96は口縁端部を上方へつまみ上る。体部外面は粗いハケ目調整し、列点文を施す。内面は上位をハケ目、下位をヘラ削りする。乳赤褐色を呈する。100は口縁部に波状文を施し、その下位に直径0.5cmの小円孔を穿つ。体部外面はハケ目調整で、焼成は良く淡橙褐色を呈する。

〔高杯〕B 1(101・102)、C (103) が出土する。101は残存高11cmの長脚の高杯で、脚柱部内面にしばり痕をみる。102は内面に指圧痕を残す。

〔鉢〕A (104) がある。体部に3条の凹線と小円孔が穿たれている。暗橙褐色を呈し、胎上に砂粒を多く含む。

〔底部〕A (108~115)、B (116~118)、C (105~107) が出土した。Cは底部に1cm前後の円形孔を穿つ。108:109は底外面をハケ目調整する。109の内面はヘラ削りする。焼成は良く灰褐色を呈する。

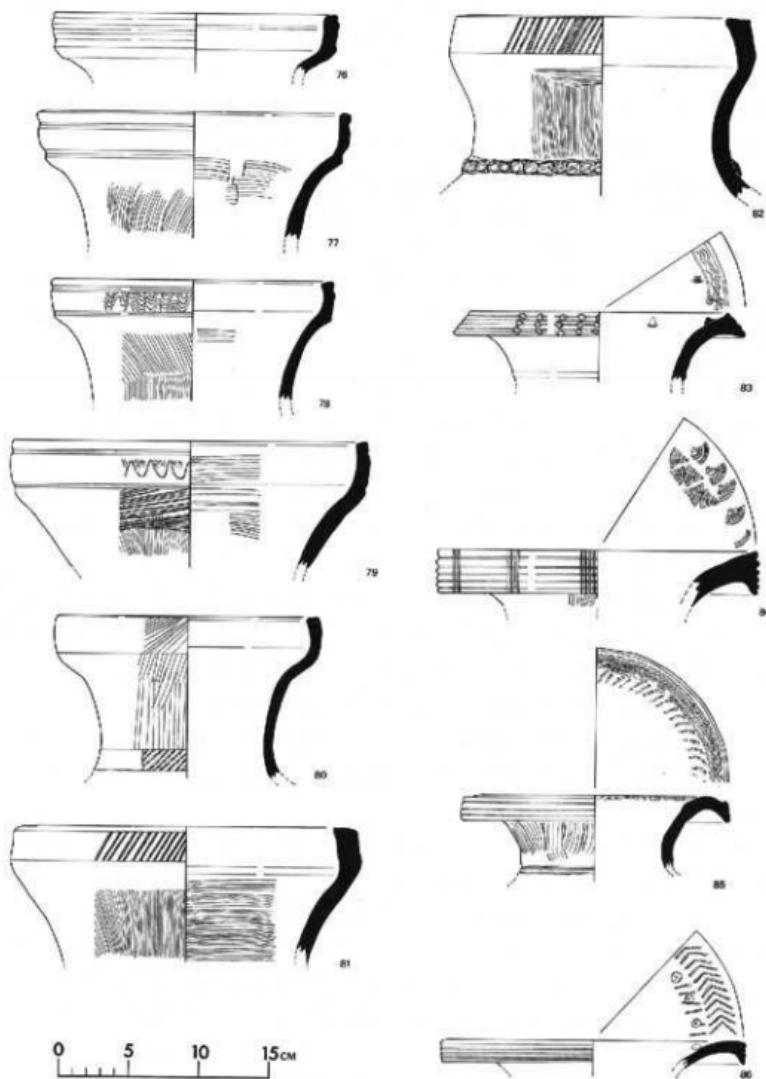
S R I - b 壺14、甕14、高杯2、鉢1と底部が11点出土した。

〔壺〕A 2(124)、B 1(120~123)、B 3(119)、C 1(125)、C 3(126)、D (127)、E (128~130)、F (131)、G (132~134) がある。B 3の119は頸部外面にハケ目とヘラ描沈線が対になって施文され、口縁部はハケ目調整後、棒状浮文を2本1対に貼り付ける。赤褐色を呈する。122は口縁部内外面をハケ目調整する。123は口縁部に凹線がめぐり、壺以外の器種の可能性も考えられるものである。125は口縁部外面に2段の竹管文を施文し、内面は竹管文をはさんで櫛描列点文を施す。126は口縁部外面に3本1対の棒状浮文を、内面に櫛描綫杉文と列点文を施文する。130の口縁部は細かい輪花状を呈し、体部外面に直径2cm位の円形文を施文する。内外面ハケ目調整する。橙褐色を呈する。128・129は頸部に2個1対の小円孔を穿つ。133は体部下位に小孔が1個穿たれている。134は体部の最大径が下位にあり大きく屈曲し底部となる。体部外面はハケ目調整を施し、内面に指圧痕を残す。131・132はミニチュア土器の可能性がある。

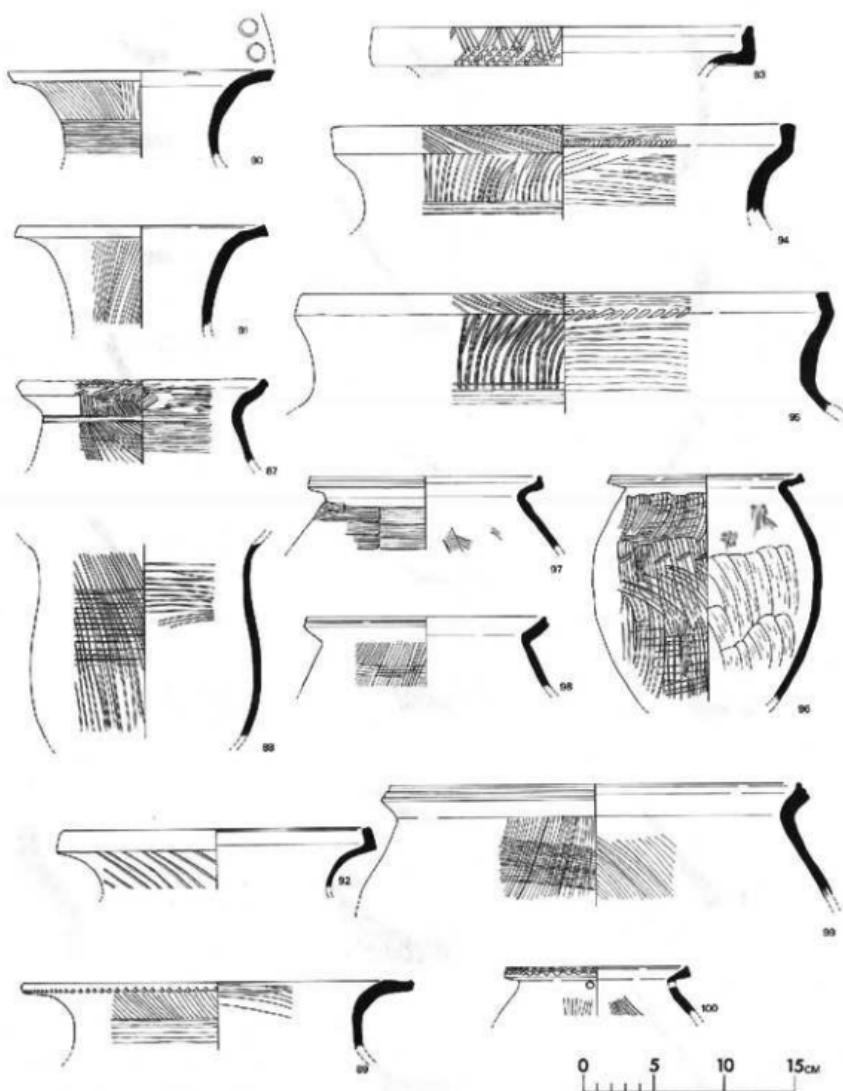
〔甕〕A (135~140)、B 1(138・139)、C (142~144)、E (141・145) がある。135は受口状口縁の外面に刺突列点文を施す。136~140は口縁部の内外面をハケ目調整する。137は大型品で、口縁部内面に櫛状工具による「×」印の連續文を施文する。138は口径40.4cmを測り、非常に粗いハケ目を体部外面に施す。灰茶褐色を呈する。141は小型品で、口径8.8cmを測る。体部外面に刺突列点文と櫛描文を2段に施文する。口縁部は内傾する。灰茶褐色を呈し外面にススが付着する。143は口径27.4cmを測り、口縁部は外方に開く。142は頸部に2個1対の小円孔を穿つ。

〔高杯〕B 1(146)、D (147) がある。147は脚幅径7.4cmを測り赤褐色を呈する。

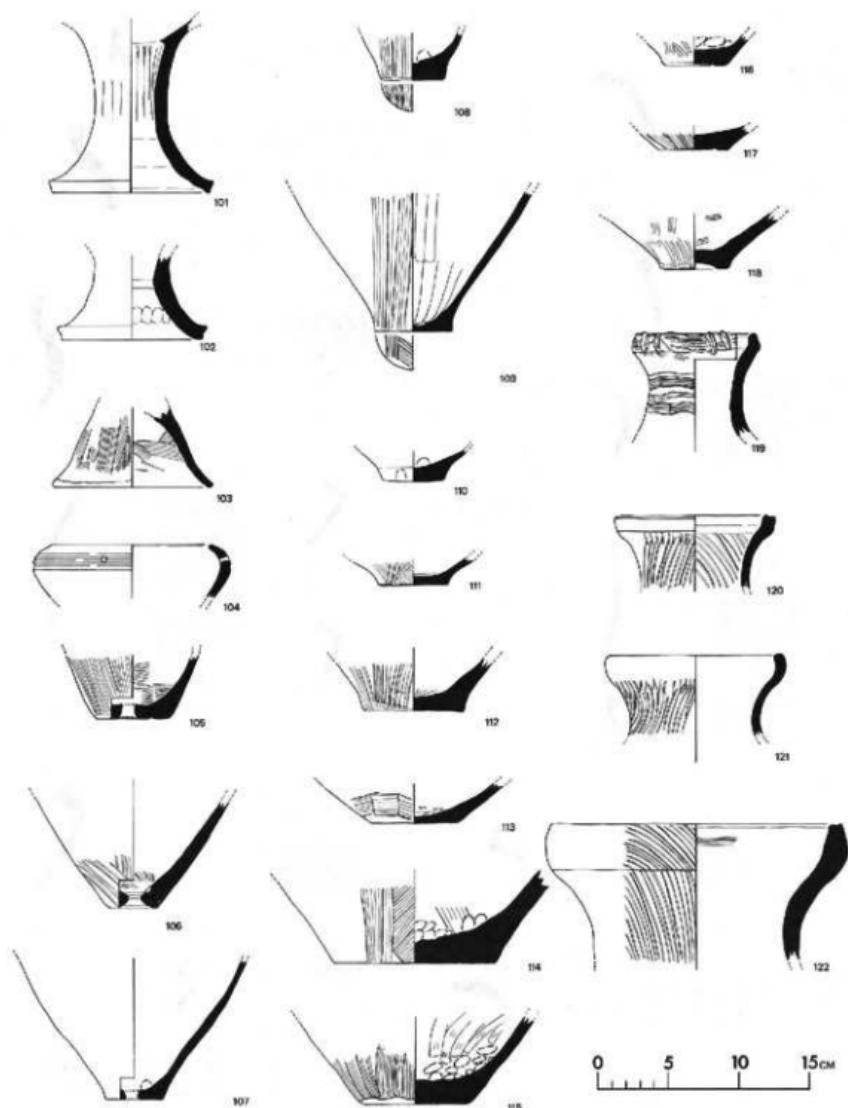
〔鉢〕C (148) がある。球形の体部に外反する口縁部が付く。黄褐色を呈し、胎上



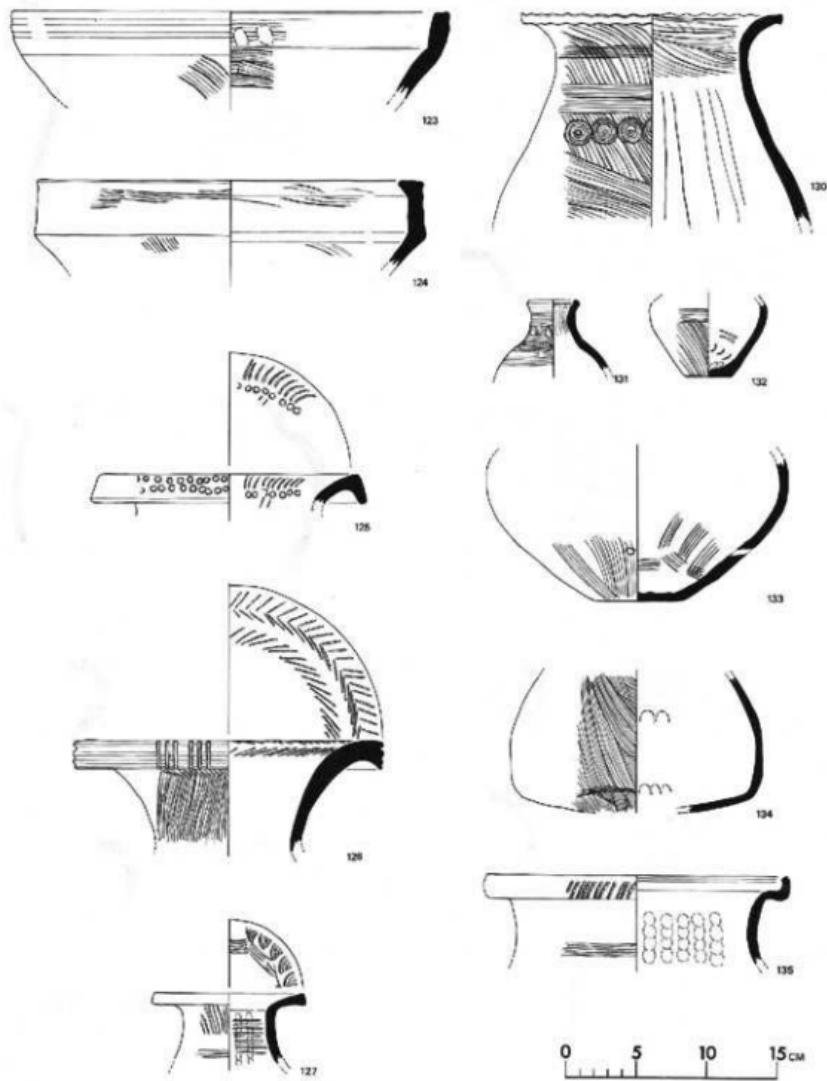
第16図 出土遺物(SR1-a)



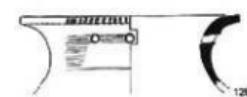
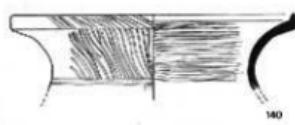
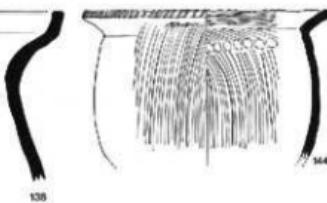
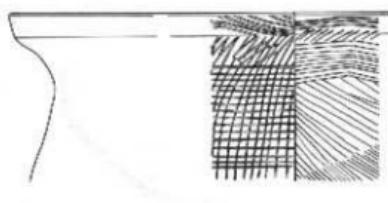
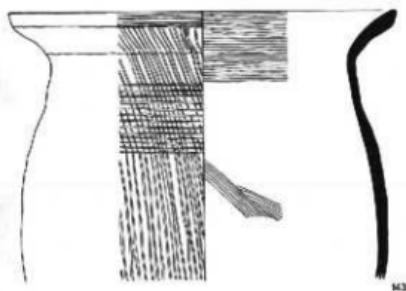
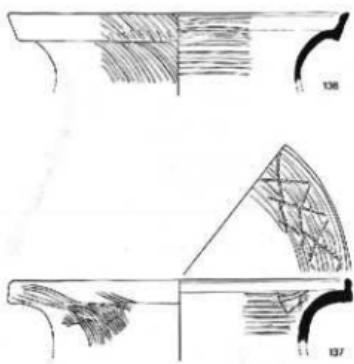
第17図 出土遺物(SR1-a)



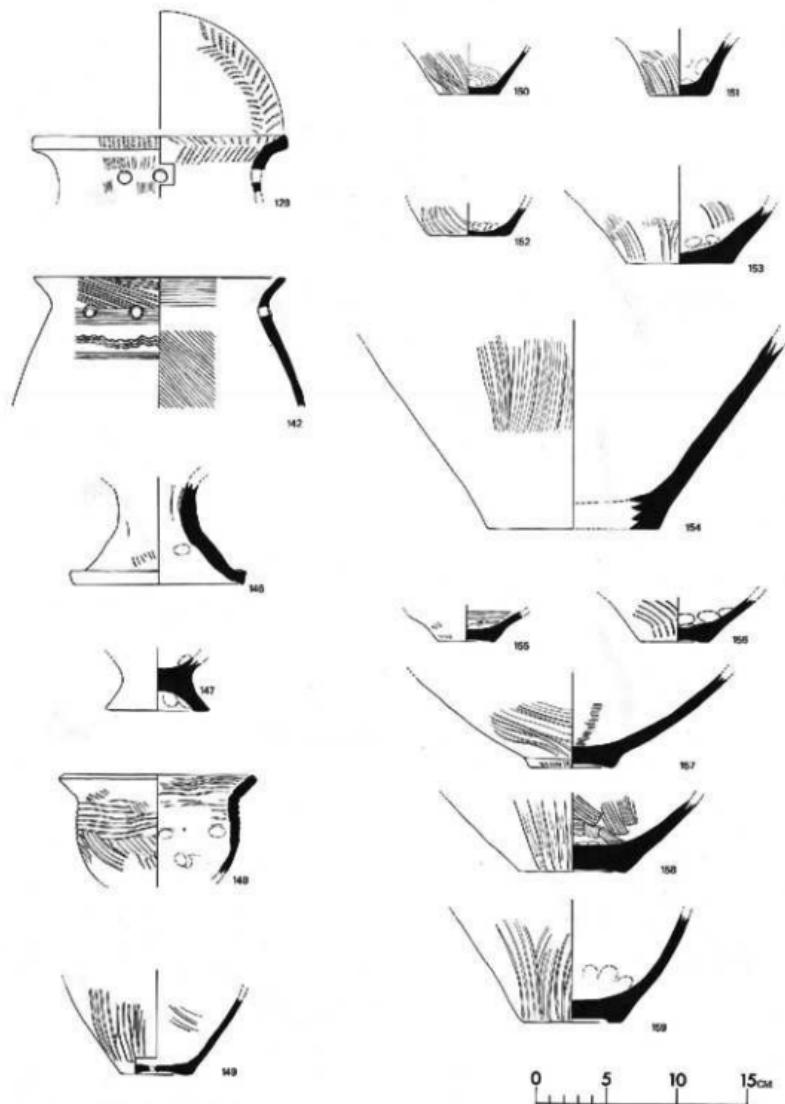
第18図 出土遺物(SR1-a、SR1-b)



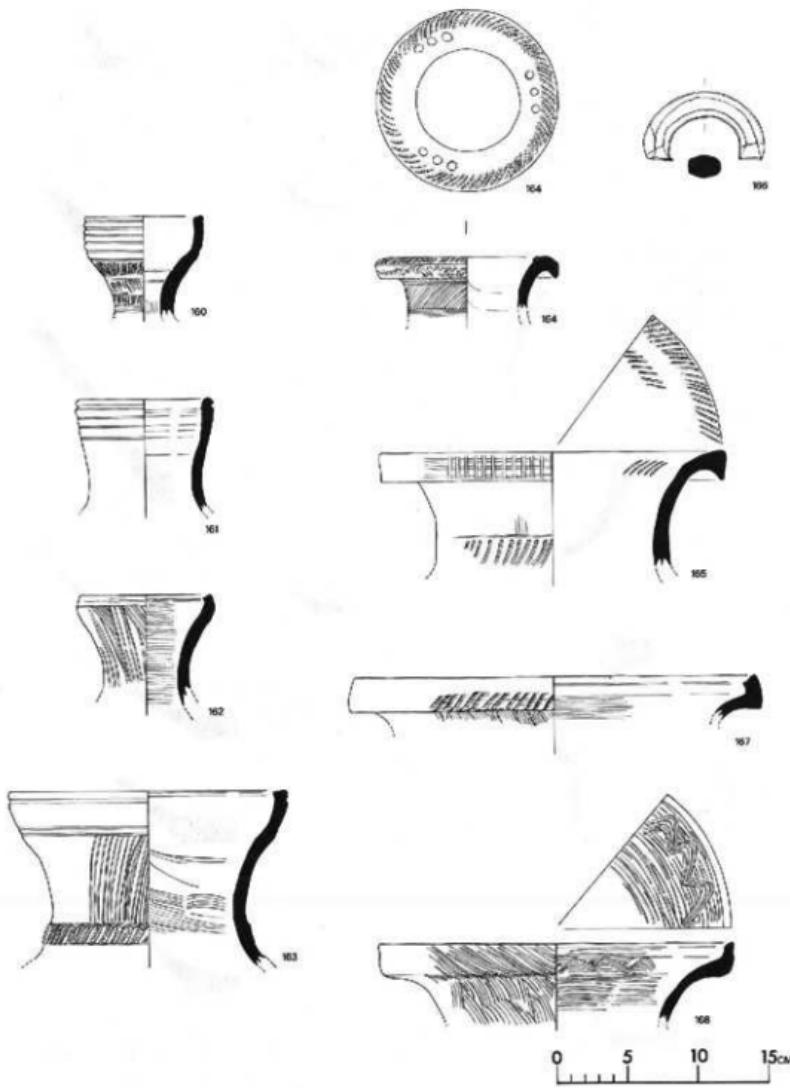
第19図 出土遺物(SR1-b)



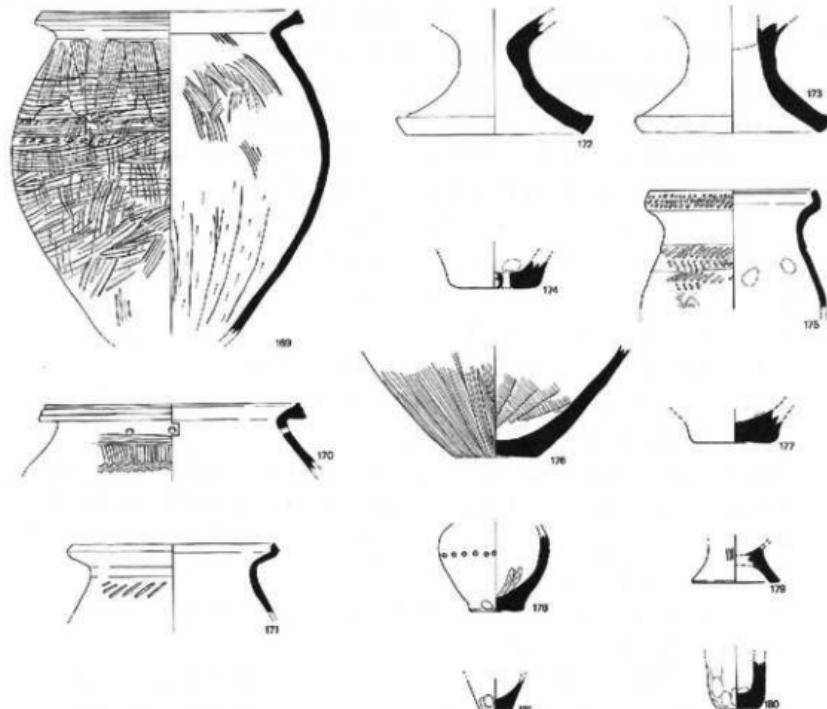
第20圖 出土遺物(SR1-b)



第21図 出土遺物(SR1-b)



第22図 出土遺物(SR1-c)



0 5 10 15 CM

第23図 出土遺物(SR1-c、DトレンチSX1、ミニチュア土器)

に小石を含み粗い。

〔底部〕 A ( 151~ 154) 、 B ( 155~ 159) 、 C ( 149 + 150) がある。 157は壺の底部とみられる。 154は底径12.1cm測り、今回出土した底部では最も大きい。灰橙褐色を呈する。

S R I - C 壺 6 、甕 5 、高杯 2 と底部が 1 点出土した。

〔壺〕 A 2 ( 163) 、 B 1 ( 162) 、 B 2 ( 160) 、 B 4 ( 161) 、 C 1 ( 164 + 165) がある。 160は口縁部が受口状に立ち上り、端部に面をもつ。外面に 6 条の凹線とその下位に櫛描列点文を 3 段施文する。乳赤褐色を呈する。 163は口径19.6cmを測り、口縁外面に 2 条の凹線をもつ。頸部はハケ目調整し、櫛状工具で施文した貼り付け突帯がめぐる。明橙褐色を呈する。 164は口縁部をよく残す。口縁内面に 3 個 1 対の偏平な瘤状突起をもち、外面に波状文を施す。口径13.0cm、乳赤褐色を呈する。

〔甕〕 A ( 167 + 168) 、 C ( 169~ 171) がある。 169は体部中位に最大径をもつ。体部外面は縱方向のハケ目調整の後、横方向にハケ目する。下位のハケ目は乱れる。中位に櫛状工具による列点文を 2 段施文する。内面は上位をハケ目、下位をヘラ削り調整する。乳赤褐色を呈し、胎土に小砂粒を多く含む。

〔高杯〕 B 1 ( 172 + 173) がある。脚径がいずれも12.6cmを測る。

〔底部〕 C ( 174) 底部に円孔を穿ち、赤褐色を呈する。

D トレンチ S X I 甕 1 、底部 2 点がある。

〔甕〕 A ( 175) は受口状口縁となり、外面に列点文を施文し、体部にも列点文と波状文を施す。器面全体にススが付着する。口径11.8cmを測り、暗茶褐色を呈し胎土は緻密である。

F トレンチ S R 4 底部 2 点が出土した。

〔底部〕 A ( 176 + 177) 176は底径 5.9cm の平底で、内外面を強くハケ目調整する。乳赤褐色を呈する。

ミニチュア土器 C トレンチから出土したもので 178~ 181は S D 1 から、 180は柱穴から出土した。 178は壺形土器で体部外面の中位に竹箒文を施し、底部に指圧痕を残す。内面はヘラ磨きである。胎土は緻密で淡赤褐色を呈する。 180 + 181は手づくね土器で内外面に指圧痕がよく残る。ともに黒褐色を呈する。

## 小 結

今回出土した弥生土器は B トレンチの S R 1 - a ~ c と C トレンチの S D 1 に集中し大半を占める。ここでは S R 1 - a 1 を 1 河川として考えることにする。また、弥生土器の中で、形態変化の明らかで、研究の進んでる壺と甕についてここで取り上げる。出土土器のうち底部を除いた数量は壺42.4%、甕40.8%、高杯12%、鉢 4.8% である。

S R 1 から出土する壺B(119)は、口頸部の文様と形態から、また、壺A(82)の頸部にみられる指頭圧痕をもつ貼り付け突帯などは畿内第Ⅲ様式(新)併行期的な様相を呈している。同種の遺物は長浜市鴨田遺跡<sup>⑨</sup>から出土している。他の大部分の遺物は S D 1 出土遺物も含めて、畿内第Ⅳ様式併行期の範囲内におさまる。

壺A<sup>10</sup>は頸部に櫛描列点文や口縁部外面に四線文を施すものと波状文を施すものがある。形態的には畿内の壺形土器の特徴をもつが、上記の施文法は近江的な装飾とみられ、それも湖東地方から湖北地方に用いられた文様の可能性がある。長浜市鴨田遺跡<sup>11</sup>、同大辰巳遺跡<sup>12</sup>、八日市市内堀遺跡に同種の遺物をみる。

窓はかって佐原 真氏の分類した「窓A」の型式に相当するのがC・D・F型式で「窓B」に相当するのがA・B1・B2・Eである。今回の報告で窓Aに分類した土器はいわゆる近江特有の受口状口縁を呈し、口縁外面に斜目方向のハケ目を施文するものと列点文を施文する2種類がある。窓B1・B2は窓Aの口縁部の加曲を弱くしたもので、少し外反させる。口縁部外面の施文はハケ目だけで列点文はみられない。大津市大伴遺跡<sup>13</sup>、同滋賀里遺跡<sup>14</sup>、八日市市内堀遺跡などから同種の遺物が出土している。

このように、窓についても壺と同じく畿内第Ⅳ様式併行期におさまると考えてよい。今のところ、第V様式併行期の特徴をもった土器は検出されていない。

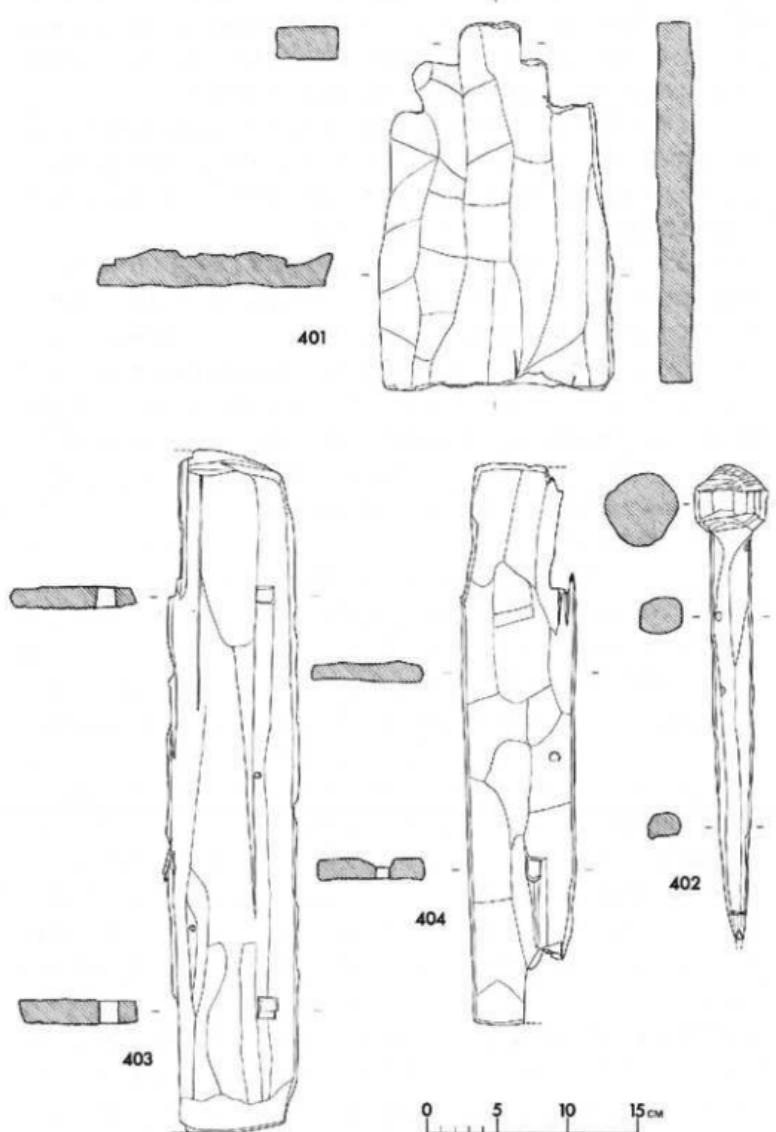
## 2. 木 器(第24図、図版二十三)

木器としてここで取り上げるものは4点ある。機能的には明らかなものはない。時期は共伴遺物から弥生時代中期に属するものである。

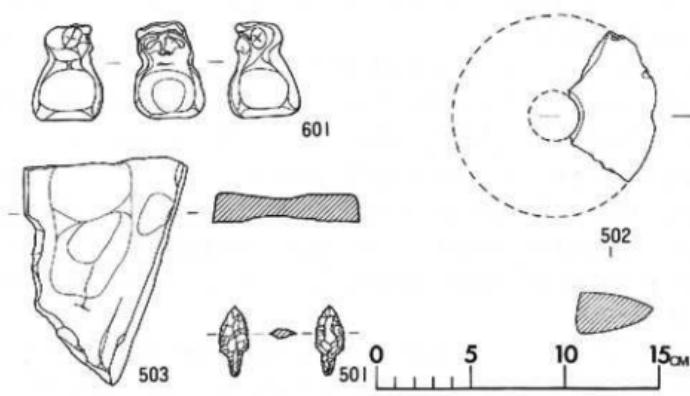
鋤状木製品(401) S D 1 から出土したもので、平面形は長方形に近く、一方の端部に2段の凸部をつける。凸部の付く側の両側面は削りを施し少し狭くなる。全長26.2cm、最大幅16.8cm、厚2.5cmあり、凸部の1段目は長3.2cm、幅9.7cm、2段目は長3.0cm、幅4.4cmを測り厚さは同じである。画面に木目方向の工具痕が認められ、ていねいなつくりである。形態から鋤と考えられ、凸部の存在から組み合せの着柄鋤とみてよい。着柄溝、柄孔は認められず、刀縁は直線状を呈する。

笄状木製品(402) Cトレンチの土塙から出土したもので、形態的に笄状を呈するが長さは33.8cmあり、用途は不明である。一端を細く削り出し、他の方に大きな突起をつくる。断面は隅丸方形を呈し、中央部の径は3.0×2.6cmを測り、突起は断面円形で直径5.2cmである。全体にていねいに加工し、削り痕をみる。突起には工具痕が残る。

板状木製品(403・404)ともに方形の孔をもつもので、403はS R 2 から、404は S D 1 から出土した。403は48.8cm、厚さ1.3~1.8cm、幅9.5cm以上を測る。孔は2ヶ所あけられ、孔の1辺は1.2~1.5cmある。2つの孔は29.2cmの間隔をもって直線上に穿たれている。両端は板を薄く削り、工具痕を残す。表面はていねいに加工



第24図 出土遺物（木 器）



第25図 出土遺物(人形土製品、石器)

されている。なお、中央部に直径 0.4cm の小孔が 2 個ある。

404は長さ 40.1cm、厚さ 1.2~1.5cm、幅 7.2cm 以上あり、孔は 1ヶ所とその延長上 20.5cm のところにもう 1 孔穿たれている。孔の 1 辺は  $1.1 \times 1.8$  cm あり、一方から穿たれている。2 個の孔の中央部に直径 0.7cm の円孔が 1 個ある。この板も両端は薄く削られている。ていねいに加工されている。

他に E トレンチ S R 2 から長さ 1m 以上、幅約 0.15m の板状木製品が出土している（図版十三）。板の中央部には長方形の孔が 1 個穿たれている。板の両端は欠失するが、両側面はよく遺存し、角は取れ丸くなる。おそらく「えぶり」として使用した木製品とみられる。

### 3. 石 器（第25図、図版十八・二十二）

石器には石鎌 1 点、環状石斧 1 点、砥石 2 点がある。

石鎌（501）B トレンチ S R 1-b から出土した打製石鎌で、有茎凸基式を呈する。長さ 3.7cm、最大幅 1.5cm、厚さ 0.5cm を測り、重さは 2.95 g である。淡黒色を呈し粘板岩質である。

環状石斧（502）S R 1-a から出土した。約 1/4 を残す。復元外径 10.8cm、内孔直径 2.8cm、最大厚 2.2cm を測り、断面は二等辺三角形を呈するが、表面は丸味をおびる。先端の刃は所々欠落する。使用痕であろう。孔は一方が狭くなる。重さは残存部 96.02g を測り、複元重量は 380g 前後とみられる。

環状石斧は現在、高島郡新旭町大曲遺跡と長浜市鴨田遺跡から出土し、今津町弘川遺跡からは縄文時代のものが出土している。畿内では弥生第Ⅲ様式に伴うものとして大阪府西ノ辻遺跡、同山畑遺跡、池上遺跡などから出土し、この石斧も弥生時代中期の製品とみてよい。

砥石（503・504）503 は平面台形を呈し、表面の研磨面と両側面を残し他は剥離する。研磨面はよく使用されており中央部が約 2mm くぼむ。なおこの砥石はハンデータイプとみられ、右手で握ると各指の位置に小さな凹みがあたる。すなわち、親指は砥石の右上に、人指し指は上端左側に、中指は左側剥離部上位に、薬指は中位に、小指を下位にあてると合う。白灰黄色を呈し、砂岩質とみられる。504 は平面長方形を呈し、S D 1 から出土した。長さ 12.2cm、最大巾 3.2cm、断面長方形を呈し、4 面とも使用する。特に 2 面はよく使用され、弓状にくぼむ。淡暗灰褐色を呈し、砂岩質である。

### 4. 土 製 品（第25図、カラー図版一、図版十八）

人形土製品（601）人面を立体的にあらわした土偶状の遺物である。眼と耳はくぼませ、口はヘラ状工具で書き、鼻は高く立体的に表現する。頭頂は平坦に表わし、ひたい部が少し突出する。被り状のものを表現したのであろうか。頬は少し細くなる。

体・胸部には手足は表現されず、底部は座のよいように平坦とし、前・後を丸く、

両側面をやや平にする。後部の丸味は大きい。

大きさは高さ 5.3cm、頭部長 2.2cm、幅 2.9cm、奥行 2.5cm、体部長 3.1cm、幅 3.8cm、奥行 3.8cm を測り、重さは 57.96g である。

この土製品は C トレンチ掘立柱建物の柱穴から出土した。共伴遺物はないが、当遺跡の柱穴はすべて弥生時代中期の遺物を包含することから、この時期に比定される。

## 第5章 まとめ

調査の結果、当遺跡は出土土器から弥生時代中期の新段階に相当する畿内第Ⅳ様式併行期の集落跡であることが判明した。

検出された建物はすべて掘立柱建物であり竪穴住居はない。これは、水田耕作等による後世の削平のため上層部が削平され、竪穴住居は消滅したのか、本来掘立柱建物だけで構成されていたムラなのか明らかではない。現在掘立柱建物だけの集落跡としては岡山県百間川遺跡、鳥取県久末遺跡、福岡県湯納遺跡がある。宵本長二郎氏はこれら遺跡について「百間川遺跡は、弥生時代中期の遺跡で沖積地の微高地に立地し、18棟以上の建物で構成され、高床住居と屋根倉か掘立柱住居と屋根倉のどちらかになるとされている。久末遺跡は弥生時代中期後葉から古墳時代前期の遺跡で低湿地に立地し、6棟の建物が確認されている。湯納遺跡は弥生時代後期の遺跡でここも低湿地に立地し、6棟の建物が確認されている。この3遺跡の建物は、桁行規模は1~4間であるのに対し、梁行は全て1間である。また、湯納遺跡では出土した建築部材から高床建物が復元されている。それによると鼠返しがなく上・下階を草壁とする高床住居と推定されている」とし、さらに「東日本では弥生時代後期にはすでに竪穴家、平家の住居と高床倉の機能分化が進み、西日本では同じ高床式の建物でも住居・倉・客殿等、多様な使われ方がみられる」と結んでいる<sup>39</sup>。

のことから、当遺跡も高床式の建物のみで構成された集落と考えることは可能である。また、建物群の中央部を流れるSD1は生活用水路の機能だけではなく、低湿地に立地するムラの湿気を取り除く役目もはたしていたとみられる。

当遺跡は琵琶湖に近く、荒神山の後背湿地帯に形成されたムラである。琵琶湖の周囲には大中の湖南遺跡や入江内湖遺跡で代表されるように、多くの弥生集落が遺存する。時期的には大中の湖南遺跡のように弥生時代中期がほとんどで、当遺跡も例外ではない。これは琵琶湖の水位の高低に強く影響されるものであり、弥生時代中期には稲作農耕を生活基盤とした農耕文化が、彦根南部の琵琶湖の周囲にも開花していたものと想像される。

また、当遺跡は荒神山を中心に半径約5kmの円内に位置する妙楽寺遺跡<sup>40</sup>、稻部遺跡<sup>41</sup>、稻里遺跡<sup>42</sup>、上岡部B遺跡<sup>43</sup>、金田遺跡<sup>44</sup>、曾根沼遺跡<sup>45</sup>と同じ弥生時代の集落の1つであり、荒神山の西側山麓には銅鏡出土伝承地である石寺遺跡もある。これらを1つの共同体として結びつけることはできないであろうか。それが地縁的共同体なのか血縁的共同体なのか明らかではないが、その地理的な相關関係、出土土器の共通性は充分に共同体として結びついていたことを物語っており、馬場遺跡が調査された意義は大きい。荒

神山は古墳時代には多くの古墳がそこに築造され、現在も神社を祭り信仰の対象となっている。石寺遺跡の銅鐸が信憑性のあるものとするならば、弥生時代にも荒神山は信仰の山として祭られていたと考えられ、そこは、また祭礼の場として種々の儀式が執り行なわれていたと推察される。

つぎに、人形土製品について考えてみたい。弥生時代の人面をあらわした遺物はこれまで、土偶や人面土器、分銅形土製品などと土器に人物像をえがいたものがある。

土器以外では岩偶や銅鐸、銅支に人物像や人面をあらわしている。

この中で、人面を立体的に表現したものとしては熊本県秋長遺跡の土偶、神奈川県ひる畠遺跡・千葉県三島遺跡の人面付き土器、鹿児島県山ノ口遺跡の岩偶、滋賀県大中の湖南遺跡の木偶などが上げられ、すべて弥生時代中期のものである。

分銅形土製品は弥生時代中期から出現し後期までみられるもので、中期は顔面の各所や頭部は具象的・抽象的に表現され、後期になると表状は形式化する。

これらは、ほとんど顔の表現であり体・胴部以下は表現されていない。では、このような人面・人物像をもつ遺物は何に使用されていたのであろうか。

後藤直氏は人物像の立体的表現について「水稻農耕にもとづく弥生社会のさまざまの場面で、とりおこなわれた祭りにもちいた道具（祭器）にときおり表現されるにすぎない」とし、さらに人面の表現を「縄文時代と同様、超越的な力をあらわしている」と述べ人間の姿と人面の表現を分け、全身像には「神」・「神々」はやどらず、「人面として表現される神々は、当時の超越的力についての観念のなかでは異質のものであつたらしい」と結論づけている。<sup>9</sup>これは、人面を表現したもの背後にある神々を、人面を通して崇拝すると理解されよう。

人面のみを表現することについては、分銅形土製品の顔面表現を東湖氏は縄文土偶祭祀の伝統を承継するものとし「土偶あるいはビーナス像などは、時代・地域をこえ、思考の発達に応じて、多元的・普遍的に創造されるものであろう。」と述べている。

ともあれ、今回出土した人形土製品は容器などに表現された人面ではなく、土偶、岩偶、木偶に似る。これらは、銅鐸や武器形祭器のように、稻魂を守護する祭器に関係する祭器と考えられており、今回の土製品も稻作を守護する祭器と考えるのが最も妥当と思われる。ただ、銅鐸や武器形祭器は共同体全体の公的呪術に伴うものであることから、銅鐸などと区別して考える必要がある。東氏は分銅形土製品を「集落内祭祀、家族集團的祭祀として成立し、あくまで集落内祭祀として終結したであろう」とされている。

このことから、当土製品も家族集團的祭祀と位置づけることは可能で、個人的祭祀形態の初源的表象をそこに求められるように思われる。

註

- ①. 北川 浩・近藤 滌「彦根市妙楽寺遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ-1 滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 昭和56年）
- ②. 本田修平「細部遺跡」（『彦根市埋蔵文化財調査報告』第3集 彦根市教育委員会 昭和57年）
- ③. 滋賀県教育委員会「昭和55年度滋賀県遺跡目録」（昭和56年）
- ④. 前掲書3
- ⑤. 本田修平「下岡部西遺跡発掘調査報告」（『彦根市埋蔵文化財調査報告』第5集 彦根市教育委員会 昭和58年）
- ⑥. 本田修平「極楽寺遺跡発掘調査報告」（『彦根市埋蔵文化財調査報告』第5集 彦根市教育委員会 昭和58年）
- ⑦. 前掲書3
- ⑧. 彦根市役所『彦根市史』上冊（昭和53年）
- ⑨. 中谷雅治他「鴨田遺跡」「国道8号線長浜バイパス開通遺跡調査報告書」II（滋賀県教育委員会 昭和48年）
- ⑩. 前掲書8
- ⑪. 石原道洋「八日市市文化財調査報告」2（八日市市教育委員会 昭和58年）
- ⑫. 前掲書8
- ⑬. 林 博通他「大伴遺跡発掘調査報告」（滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 昭和58年）
- ⑭. 田辺昭三編「湖西線関係遺跡調査報告書」（滋賀県教育委員会 昭和48年）
- ⑮. 前掲書11
- ⑯. 増補『高島郡誌』全（高島郡教育会 昭和47年）
- ⑰. 前掲書9
- ⑱. (財)滋賀県文化財保護協会山口順子氏の御教示による。
- ⑲. 「池上遺跡」第3分冊の1 石器編 ((財)大阪文化財センター 昭和53年)
- ⑳. 宮本長二郎「住生活」（『日本考古学を学ぶ』(2) 昭和54年 有斐閣）
- ㉑. 前掲書1
- ㉒. 前掲書2
- ㉓. 「古代の顔」（福岡市立歴史資料館 昭和57年）
- ㉔. 後藤 直「弥生時代の顔」（『古代の顔』福岡市立歴史資料館 昭和57年）
- ㉕. 東 蘭「分銅形土製品とその祭祀」（『古代の顔』福岡市立歴史資料館 昭和57年）
- ㉖. 前掲書

# 図 版



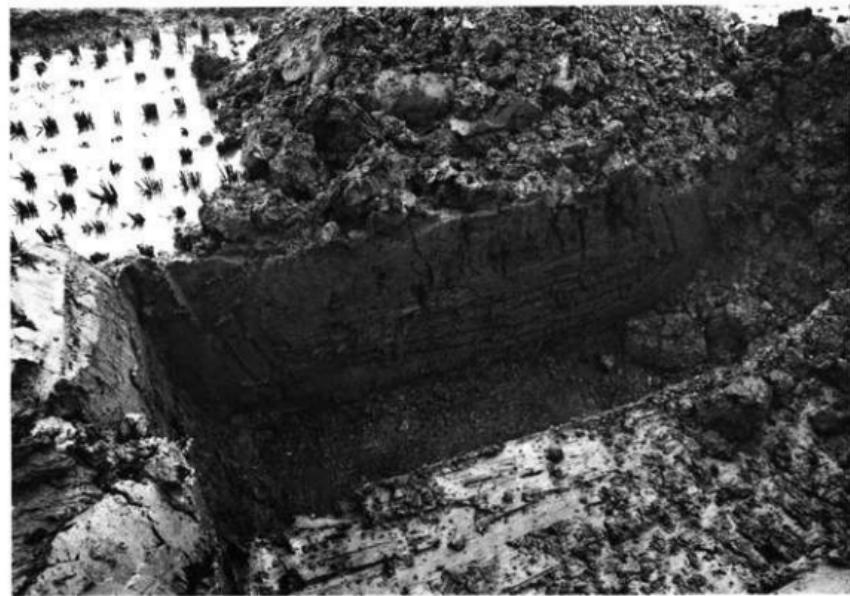
(1) 馬場遺跡遠景（北西から）



(2) 試掘調査状況



第21 グリット柱穴検出状況



第3 グリット土層断面



(1) A トレンチ全景 (北東から)



(2) A トレンチ土層断面



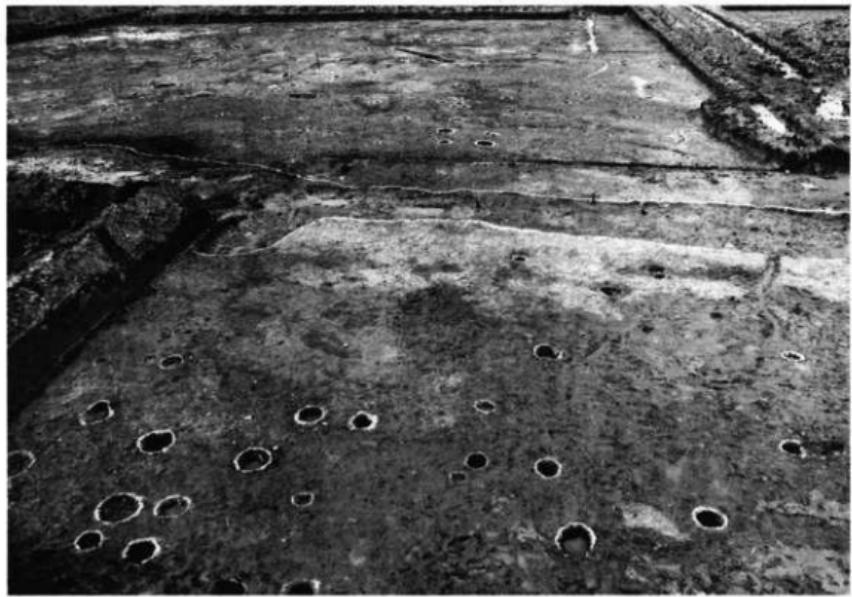
(1) B トレンチ S R I (北東から)



(2) C トレンチ全景 (南から)



(1) C トレンチ (北東から)



(2) C トレンチ S B 1・2 (南西から)



(1) C トレンチSB9・10 (西から)



(2) C トレンチSB6・7, SK3・4・6・7 (東から)



(1) Cトレンチ柱痕出土状況

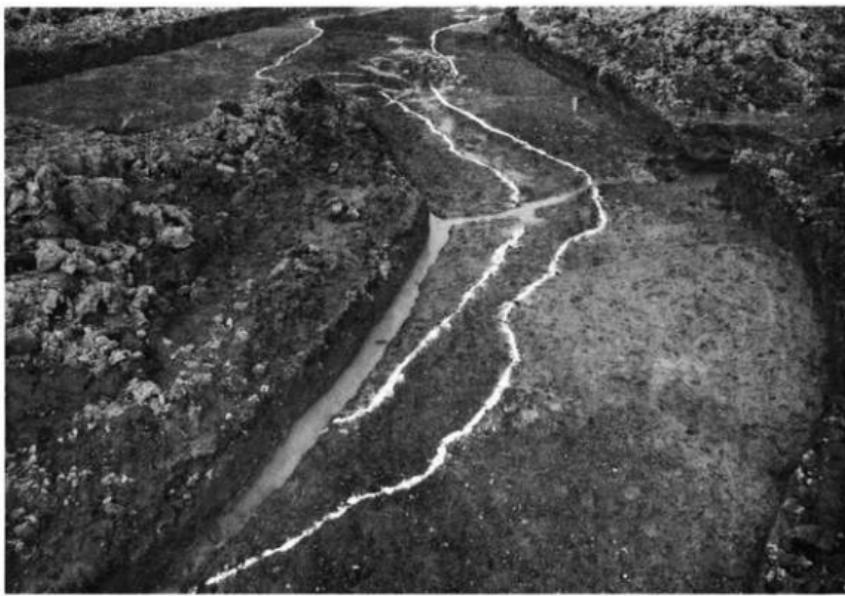


(2) Cトレンチ柱痕出土状況

(1) CトレンチSD1 (南東から)



(2) CトレンチSD3 (南東から)





(1) C トレンチ S D I 遺物出土状況

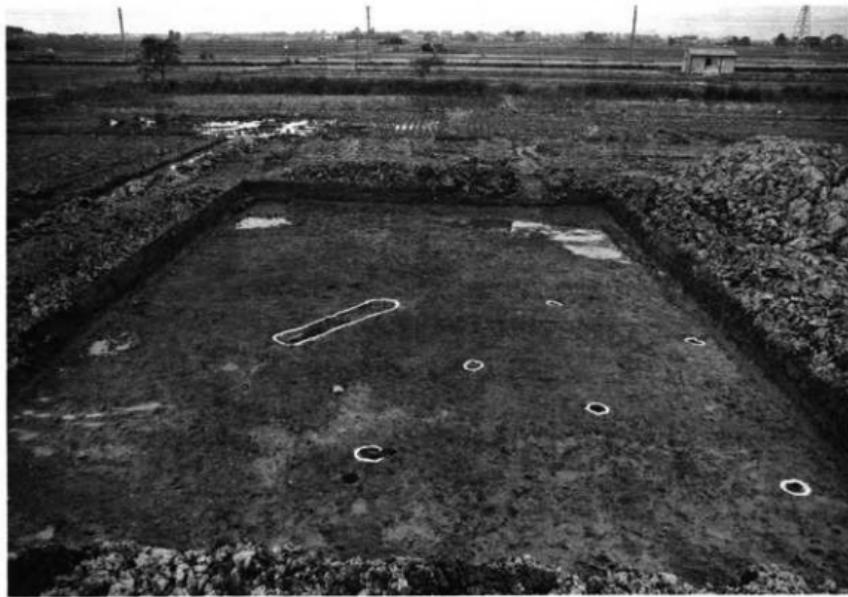


(2) C トレンチ S D I 遺物出土状況

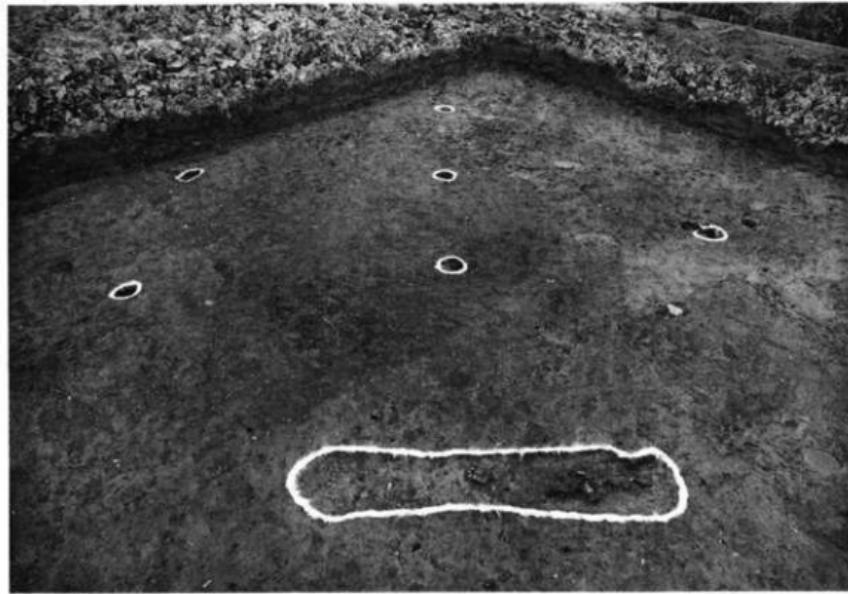


(1) B トレンチ SKI  
(2) C トレンチ SKB (奥から)

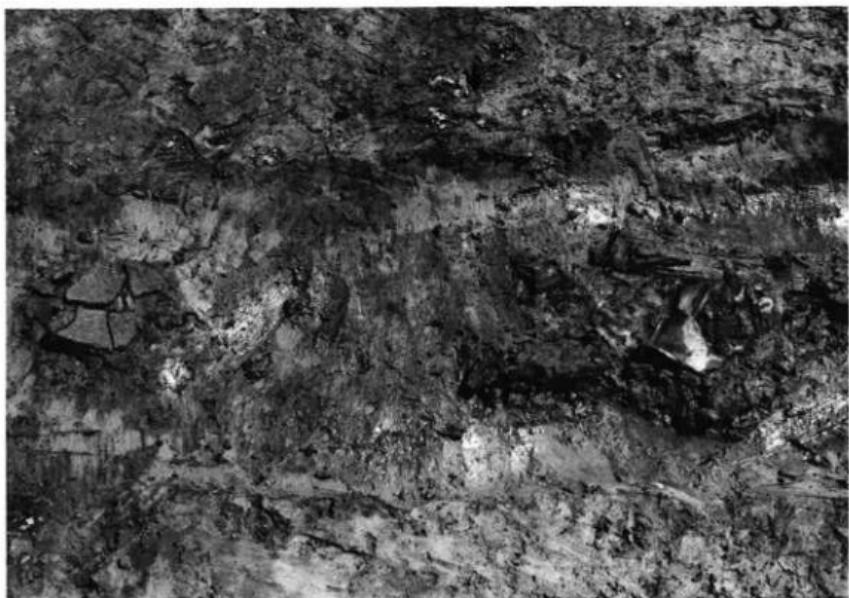




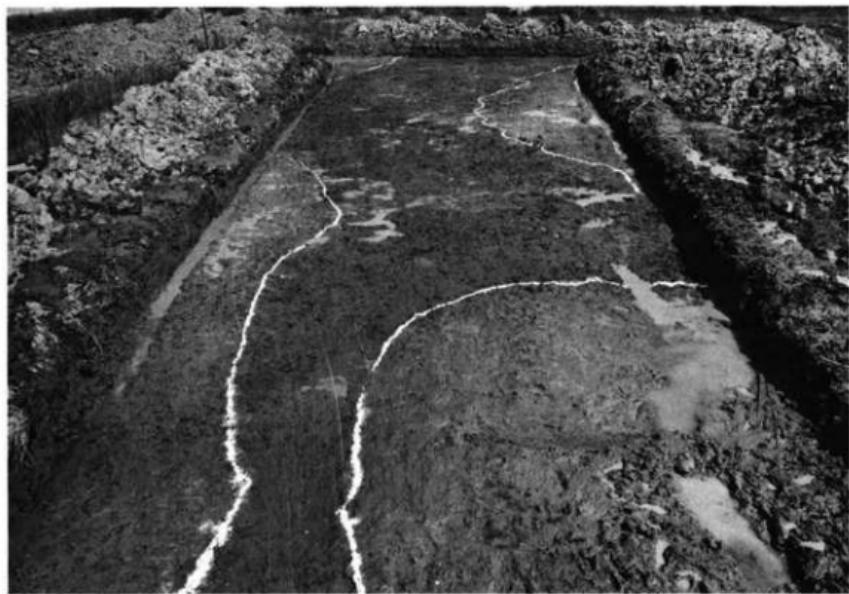
(1) D トレンチ全景 (南西から)



(2) D トレンチ S B13, S K20 (北から)



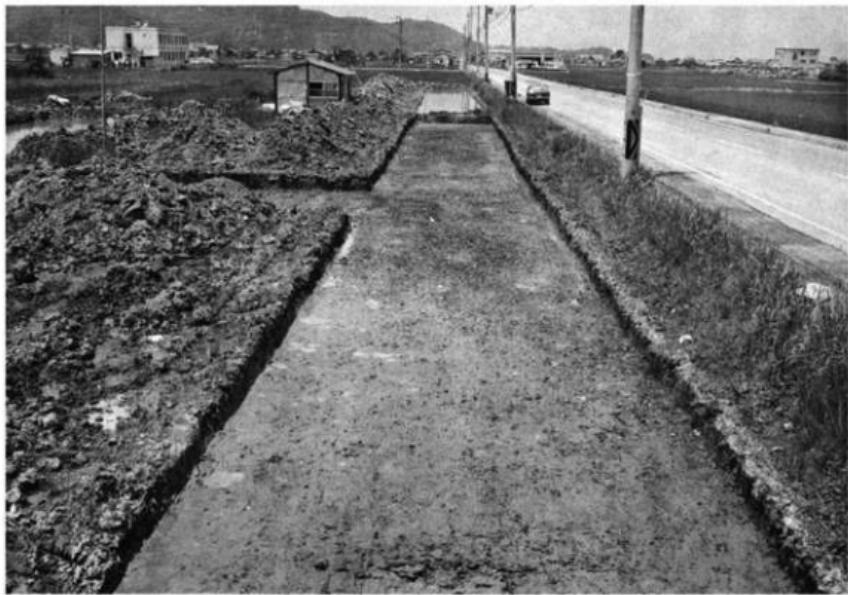
(1) D トレンチ S K20遺物出土状況



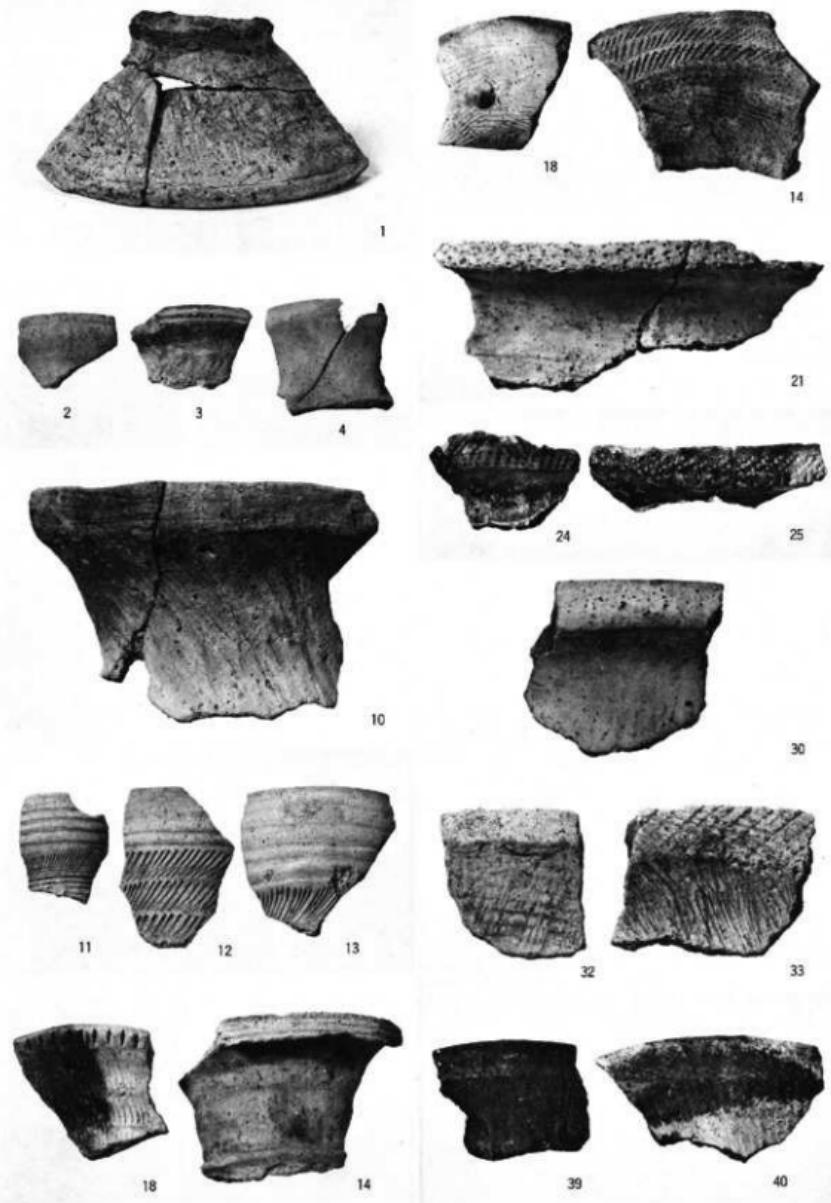
(2) E トレンチ S R 2 (北西から)



(1) EトレンチSR2遺物出土状況



(2) Fトレンチ(北東から)





43



44



68



85



85



69



96



70



72



71



98

S D 1 (43·44), 握立柱建物 · Pit (68~72)

S R 1—a (85·96·98)



141



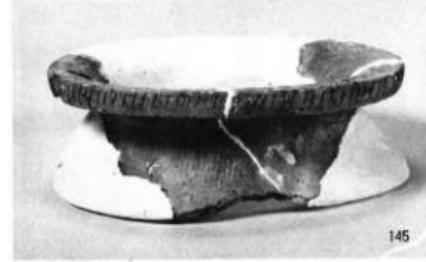
S R—a (101), S R I—b (119・122・131・132・134・138・139・141・143)



144



160



145

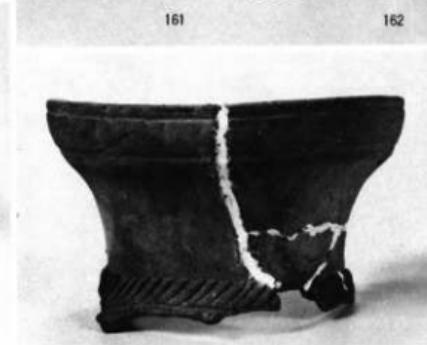


161

162



146



163



147



164

S R 1-b (144~147), S R 1-c (160~164)



169



173



501



601

S R I - c (169 + 173), 石鐵 (501),  
人型土製品 (601)



27



8



7



6



5

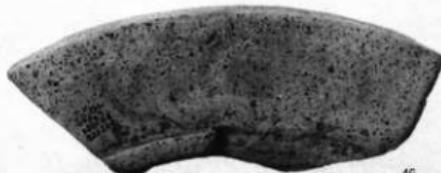


9

S D 1



17



46

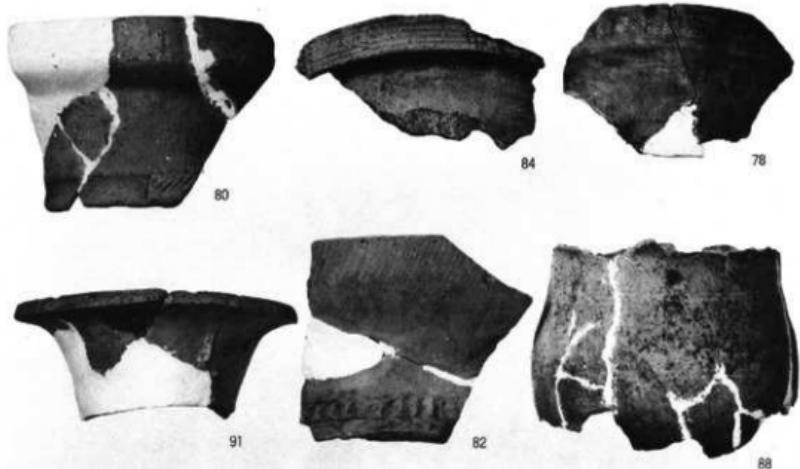


45

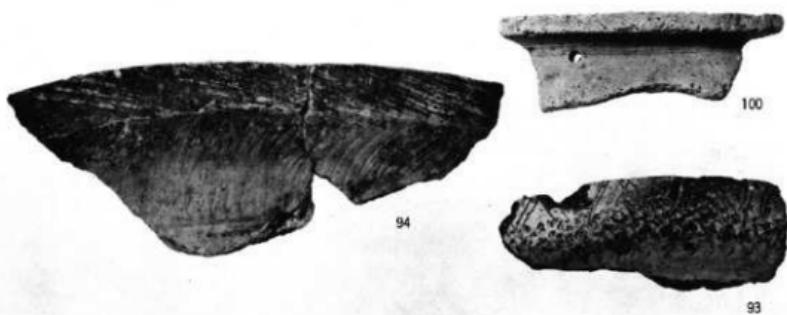
S D 1



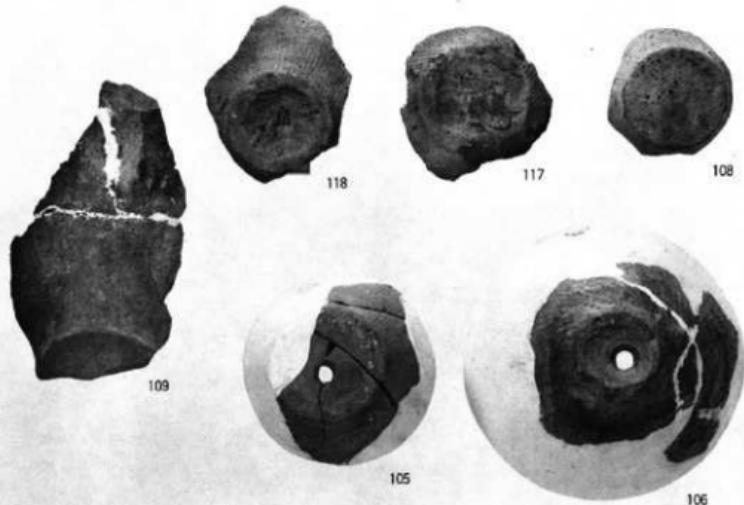
S D I



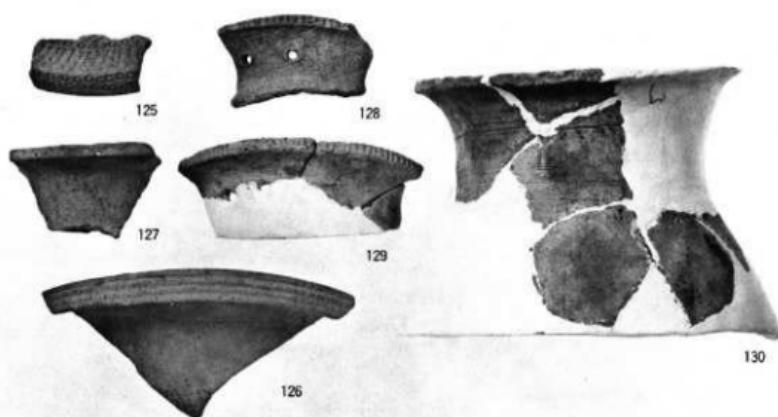
S R I-a



S R I-a



S R I-a



S R I - b



石器—環状石斧・砾石



401



402



403



404



165



167

---

馬場遺跡発掘調査報告書  
——彦根市川瀬馬場町——

昭和 59 年 3 月

編集・発行 滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

印 刷 株式会社 中村太古舎

---